高田小生水遺跡

たかたこしょうず

福岡県前原市大字高田字小生水所在遺跡の調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 76 集

2001

前原市教育委員会

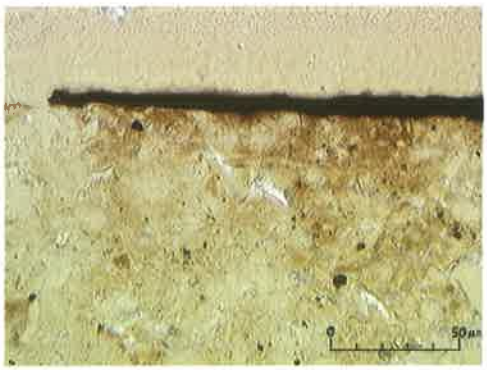
a．漆器および漆塗土器

b．磨製石鏃

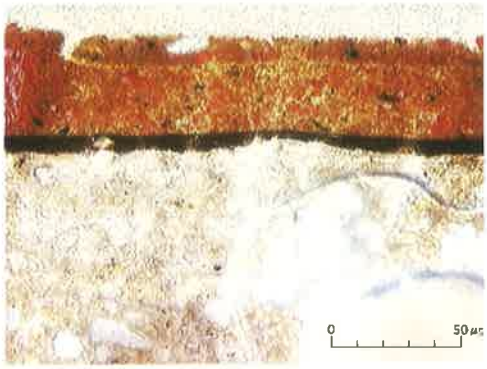
c．権状石製品

a. 調査資料（S＝1/4）

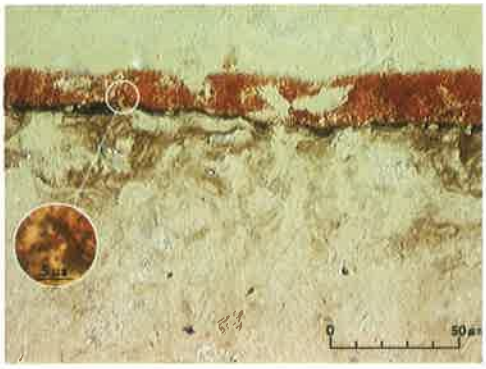
b. 資料1の塗彩復元図（S＝1/4）



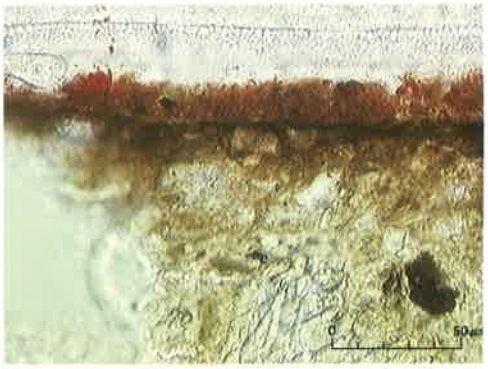
c. 資料1の断面（内面）



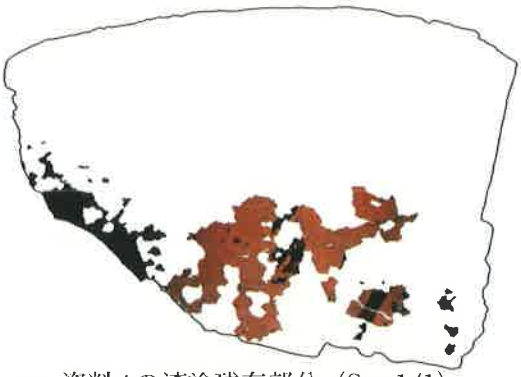
d. 資料1の断面（外面）



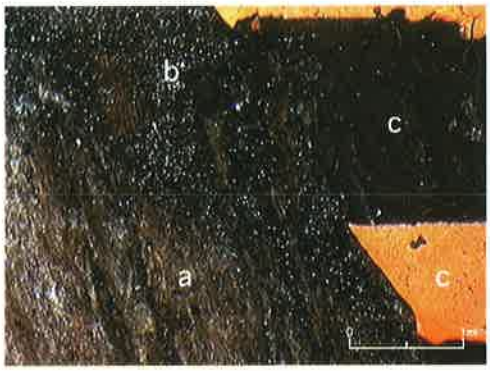
e. 資料2の断面（外面）



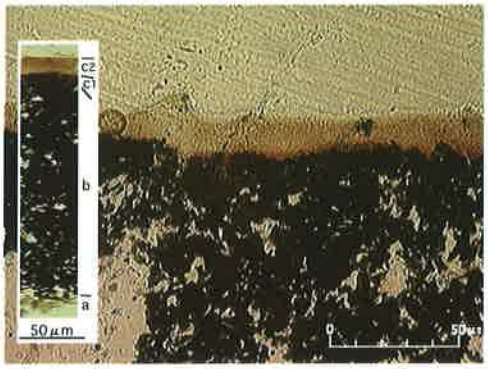
f. 資料3の断面（外面）



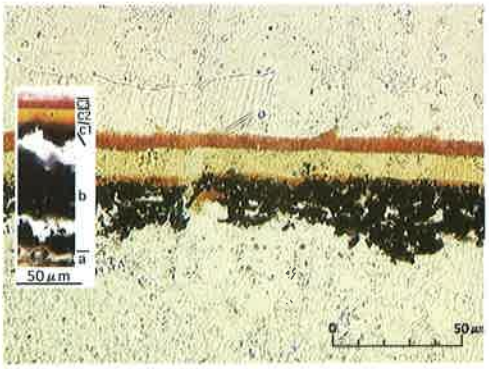
g. 資料4の漆塗残存部分（S＝1/1）



h. 資料4の表面（外面）



i. 資料4の断面（外面）



j. 資料4の断面（外面）

序

前原市は、現在福岡市のベットタウンとして急激に発展しています。JR筑肥線複線化、国道202号バイパス建設、西九州道開通などで福岡市とのアクセスが向上したことから人口が増加しつつあります。このため都市化が急速に進みこれに伴う開発が多く行われ、事前の埋蔵文化財の調査も増加の傾向を示しています。今回調査を行った高田小生水遺跡の所在する高田地区は前原市の東端に位置し、福岡市と境を接する地域で市内でも開発の多い地域です。

前原市を含む糸島地域は弥生時代には『魏志倭人伝』に登場する伊都国として栄えていました。今回の調査では、この伊都国成立以前の縄文時代の終わりから弥生時代のはじめにかけての遺跡が発見されました。前原市に於いては発見例の少ない時期の遺跡で当時の人々の生活をうかがい知る上で貴重な資料を得ることができました。特に、漆を塗った縄文土器、漆器などは発見例の少ない大変貴重なものです。

本書はこれら貴重な調査成果を報告書としてまとめたものです。本書が当地の歴史を解明する上で一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、地権者の石丸哲生氏をはじめとする関係者の方々、地元の高田地区の方々に篤いご理解とご協力をいただきましたことに対して、心から感謝いたします。

平成13年3月31日

前原市教育委員会
教育長　三嶋　利彦

例　言

1．本書は高層住宅建設に伴い前原市教育委員会が行った埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．本遺跡は福岡県前原市大字高田字小生水67番1に所在し、高田遺跡群に含まれているが、調査に当たり小字名をとって、高田小生水遺跡と称した。
3．本書に掲載した平板測量図および土層図、写真撮影は江野道和が行った。
4．本書に掲載した遺物実測図の製作は末益真奈美、楢崎尚子、江野が行った。
5．本書に掲載した図面の製図は末益、江野が行った。
6．挿図内の遺物番号と図版内の遺物番号は統一した。
7．本書の執筆は主に江野が行ったが、前原市高田小生水遺跡出土漆塗製品の調査については志賀智史氏、本田光子氏に執筆を依頼した。
8．本書の編集は江野が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査にいたる経過 …… 1
2．調査組織 …… 1
Ⅱ．高田小生水遺跡の調査 …… 2
1．位置と環境 …… 2
2．遺構と遺物 …… 5
(1) 調査の概要 …… 5
(2) 第Ⅰ地区 …… 7
(3) 第Ⅱ地区 …… 8
(4) 第Ⅲ地区 …… 9
3．前原市高田小生水遺跡出土漆塗製品の調査 …… 20
Ⅲ．小結 …… 22

図版目次

巻頭図版１　a．漆器および漆塗土器
b．磨製石鏃
c．権状石製品
巻頭図版２　a．調査資料（S＝1／4）
b．資料１の漆彩復元図（S＝1／4）
c．資料１の断面（内面）
d．資料１の断面（外面）
e．資料２の断面（外面）
f．資料３の断面（外面）
g．資料４の漆塗残存部分（S＝1／1）
h．資料４の表面（外面）
i．資料４の断面（外面）
j．資料４の断面（外面）
図版１　a．遺跡全景（東から第Ⅰ地区・Ⅱ地区）
b．第Ⅰ地区全景（東から）
図版２　a．第Ⅱ地区全景（東から）
b．第Ⅲ地区全景（北から）

図版３　ａ．第Ⅰ地区上層出土遺物
　　ｂ．第Ⅰ地区下層出土遺物
図版４　第Ⅰ地区下層出土遺物
図版５　第Ⅲ地区上・下層出土遺物
図版６　第Ⅲ地区下層出土遺物
図版７　第Ⅲ地区下層出土遺物
図版８　ａ．第Ⅲ地区下層出土遺物
　　ｂ．石器

挿図目次

第１図　高田小生水遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/50,000）　3
第２図　高田小生水遺跡と周辺の調査地点（1/2,500）　4
第３図　調査地区（1/400）　5
第４図　土層図（1/100）　6
第５図　磨製石鏃（2/3）　7
第６図　権状石製品（1/2）　8
第７図　漆器および漆塗土器（1/2）　10
第８図　第Ⅰ地区上層出土遺物（1/3・1/4）　10
第９図　第Ⅰ地区下層出土遺物（1/3・1/4）　11
第10図　第Ⅲ地区上層および下層出土遺物（1/3）　12
第11図　第Ⅲ地区下層出土遺物（1/3）　13
第12図　第Ⅲ地区下層出土遺物（1/3）　14
第13図　石器（2/3・1/3）　15

表目次

第１表　出土土器一覧表　16
第２表　出土石器一覧表　19
第３表　赤色顔料の分析結果　20

Ⅰ．はじめに

１．調査にいたる経過

今回の調査の対象となった高田小生水遺跡は、福岡県前原市大字高田字小生水67番1に所在する。周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地である高田遺跡群にあたり、過去に2回の発掘調査が開発に伴って行われている。

当地点の埋蔵文化財発掘の届出が地権者である石丸哲生氏より前原市教育委員会へ提出されたのは、平成12年4月17日であった。申請地は高田遺跡群内の過去の発掘調査結果および地形から埋蔵文化財包蔵の可能性が高いと考えられていた場所であった。開発計画に基づき平成12年4月28日に試掘調査を実施したところ埋蔵文化財の包蔵が確認され、以後入念な協議、連絡を経て発掘調査を実施することとなった。調査期間は同年8月4日～9月26日の約2ヶ月に渡った。調査にあったっては、調査地区が狭く面積での制約が大きかったため共同住宅の建て面積のみを発掘調査し、記録保存の措置を講じ、駐車場等基礎の入らない部分は現状保存を図ることとした。

以上、調査に至る経過について概略を記した。なお、地権者の石丸哲生氏をはじめ関係各位には多大なるご理解とご好意をいただきました。深く謝意を表します。

２．調査組織

高田小生水遺跡の発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

調査主体	前原市教育委員会	
総括	教育長	三嶋利彦
	教育部長	有田種之
	文化課長	松井　昇
	参事	小池史哲
	文化財係長	林　覚
庶務	文化振興係長	藤井正信
		濱地　克
調査	文化財係	江野道和

現場作業　青木輝代、市丸千賀子、市丸正喜、大島小夜、川上久美子、川上豊子、小金丸勲雄、杉本美知子、高橋マツ子、立山ミヨ子、徳永美根子、中田朋子、原口マツノ、藤木綾子、藤木和子、堀田昇、牧井定代、溝口英太郎、山崎晴雄、米山八重子

整理作業　末益真奈美、楢崎尚子

Ⅱ．高田小生水遺跡の調査

１．位置と環境

前原市は福岡県の西部に位置し志摩町、二丈町、福岡市西部とあわせて糸島地域に含まれる。糸島地域は玄界灘に突出した半島とその背後の平地から構成される。

当地域の東側博多に通じる方向には今津湾、西側唐津に通じる方向には加布里湾が湾入している。当地は明治時代まで怡土郡と志麻郡の２郡に分割されており、「志麻郡」は古代において「嶋郡」と呼称されていた。当時、加布里湾から今津湾にかけては糸島水道と呼ばれる海峡が通じており、嶋郡はこの名のとおり島としての景観を呈していたと考えられている。しかしながら近年、地下貝化石層の分析調査等により加布里湾と今津湾は現在よりも大きく湾入していたものの水道最狭部と考えられる志登～泊間が通じておらず、嶋郡が完全に独立した島でなかった可能性が示唆されてる。高田小生水遺跡の位置する高田地区は、現在最も近くの北東の海岸線から直線距離で3㎞ほど離れているが古代においては糸島水道の南岸に位置し、海のすぐ近くであったと考えられる。

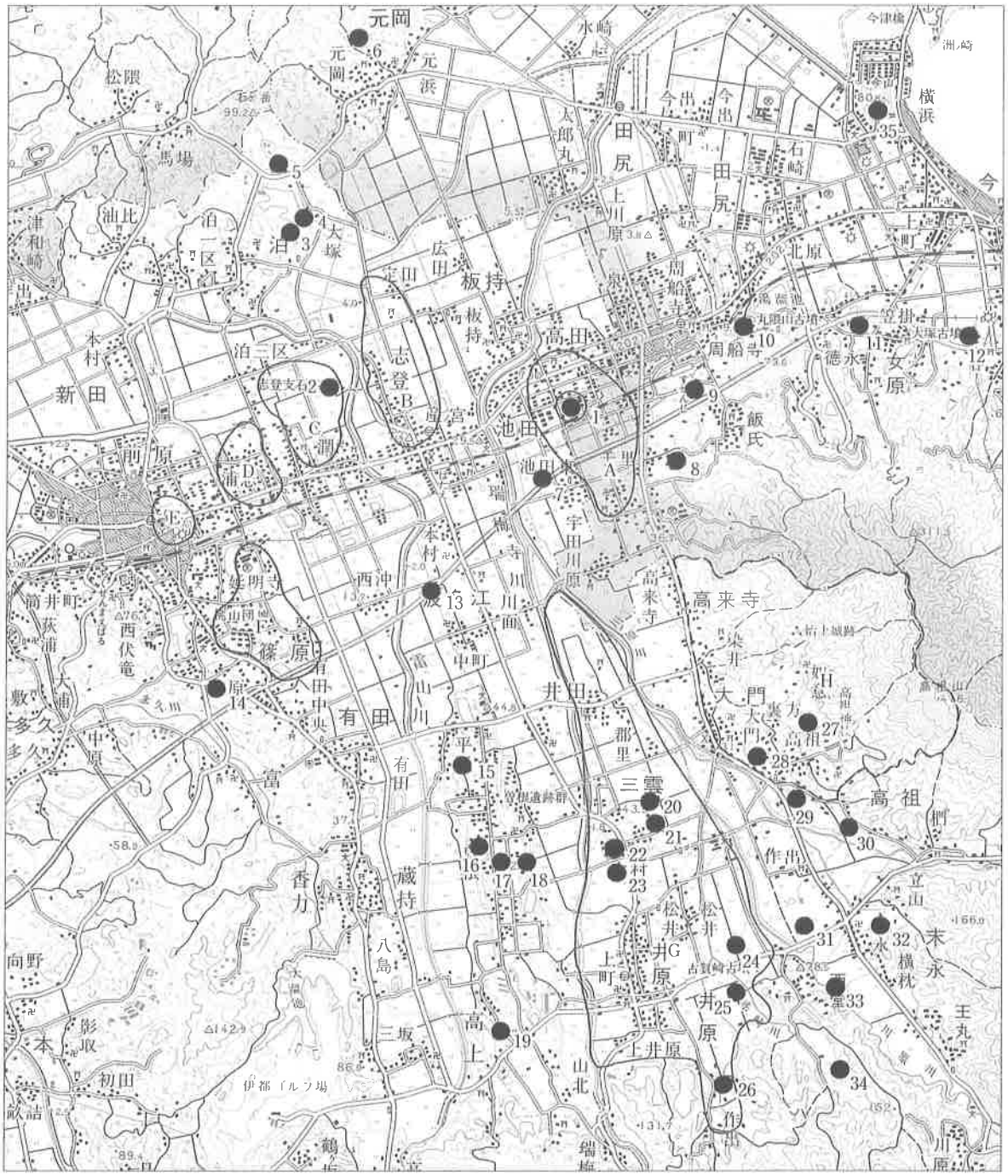
当遺跡から北西に約2㎞、糸島平野のほぼ中央部を流れる雷山川の西岸には弥生時代早～中期の志登支石墓群が位置し、平野の東部を流れる瑞梅寺川を約2㎞遡ると井田用会・曽根石ヶ崎・三雲加賀石の支石墓が点在する。これら支石墓からは、柳葉形磨製石鏃・太型管玉など朝鮮半島との深い関わりを示す遺物が出土している。また、三雲・井原地区の東部に位置する高祖遺跡群では、縄文晩期から弥生時代早期に至る時期の自然流路が検出され、そこから大量の土器や石器などの生活遺物が出土している。これら遺跡により後の時代の三雲・井原地区を中心として栄える伊都国の前時期の様相をうかがい知ることができる。

高田小生水遺跡はこれら伊都国の成立以前の遺跡とほぼ同時期に当たる。高田地区は現在福岡市と境を接し、近くには井原山山系に源を発する瑞梅寺川が流れている。当遺跡は瑞梅寺川が北西から北東へと流れを変え大きく湾曲する部分の内側に所在する。周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地である高田遺跡群に含まれ、過去に2回の発掘調査が実施されており比較的様相が明らかになっていた。2回の調査は昭和60年に高田小生水遺跡から北西方向へ約200mの地点で行われた賃貸共同住宅新築に先立つ高田遺跡群第１次発掘調査[1]。平成８～10年度の隣接地を走るJR筑肥線複線化に先立って実施されたＪＲ筑肥線複線化用地内遺跡群の発掘調査[2]である。昭和60年の調査では、溝2条、自然河道、土坑１、柱穴3が検出され、縄文晩期～弥生前期に至る時期の土器、木製品などが出土した。平成８～10年度の調査では、古墳時代～平安時代にかけての水田が時代を区切り3層検出され、足跡・畦畔なども見出され、縄文時代晩期～古墳時代の土器、須恵器、土師器、陶磁器などの土器類、農耕具などの木器類、石庖丁などの石器類が出土した。

今回の調査はこれまでに発見例の少なかった縄文時代晩期～弥生時代早期の時期の貴重な資料を得ることとなった。

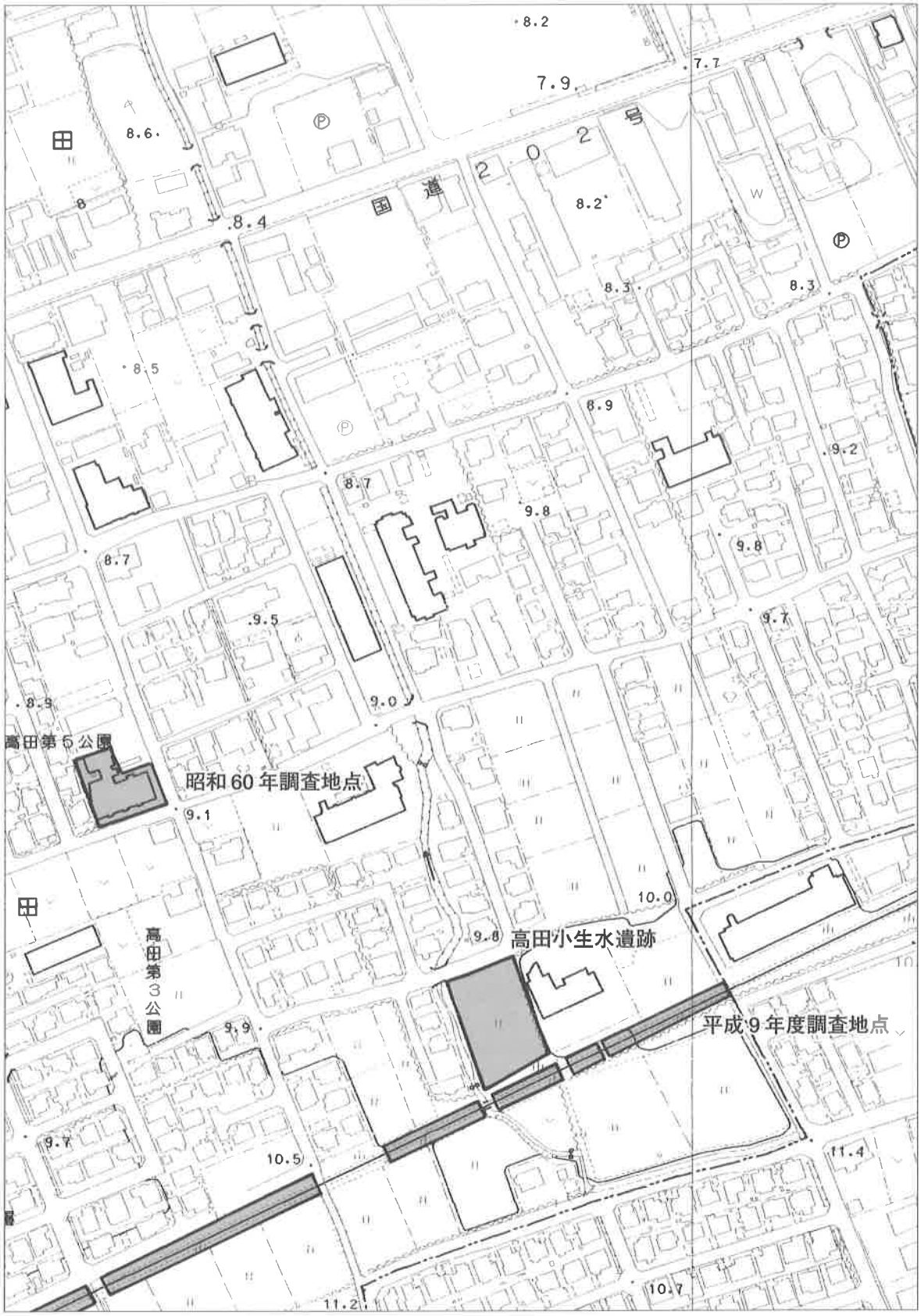
註１）岡部裕俊『高田遺跡群－第１次発掘調査報告』（前原町教育委員会、1986年）。

２）瓜生秀文『JR筑肥線複線化用地内遺跡群』（前原市教育委員会、2000年）。



1. 高田小生水遺跡
2. 志登支石墓群
3. 御道具山古墳
4. 泊大塚古墳
5. 泊桂木遺跡
6. 元岡池ノ浦古墳
7. 池田東遺跡群
8. 飯氏二塚古墳
9. 飯氏遺跡群
10. 丸隈山古墳
11. 若八幡宮古墳
12. 今宿大塚古墳
13. 波多江遺跡
14. 上鑵子遺跡
15. 平原遺跡
16. ワレ塚古墳
17. 銭瓶塚古墳
18. 狐塚古墳
19. 高上石町遺跡
20. 端山古墳
21. 築山古墳
22. 三雲南小路遺跡
23. 井原鑓溝遺跡（推定地）
24. 井原塚廻遺跡
25. 西堂古賀崎古墳
26. 井原作出古墳
27. 高祖東谷１号墳
28. 怡土城郭内遺跡群
29. 高祖榎町遺跡
30. 高祖大鷲遺跡
31. 末永六ノ坪遺跡
32. 末永高木遺跡
33. 末永古屋敷遺跡
34. 西堂四反田古墳
35. 今山遺跡
A. 高田遺跡群
B. 志登遺跡群
C. 潤遺跡群
D. 浦志遺跡群
E. 上町向原遺跡
F. 篠原遺跡群
G. 三雲・井原遺跡群
H. 怡土城

第１図　高田小生水遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/50,000）



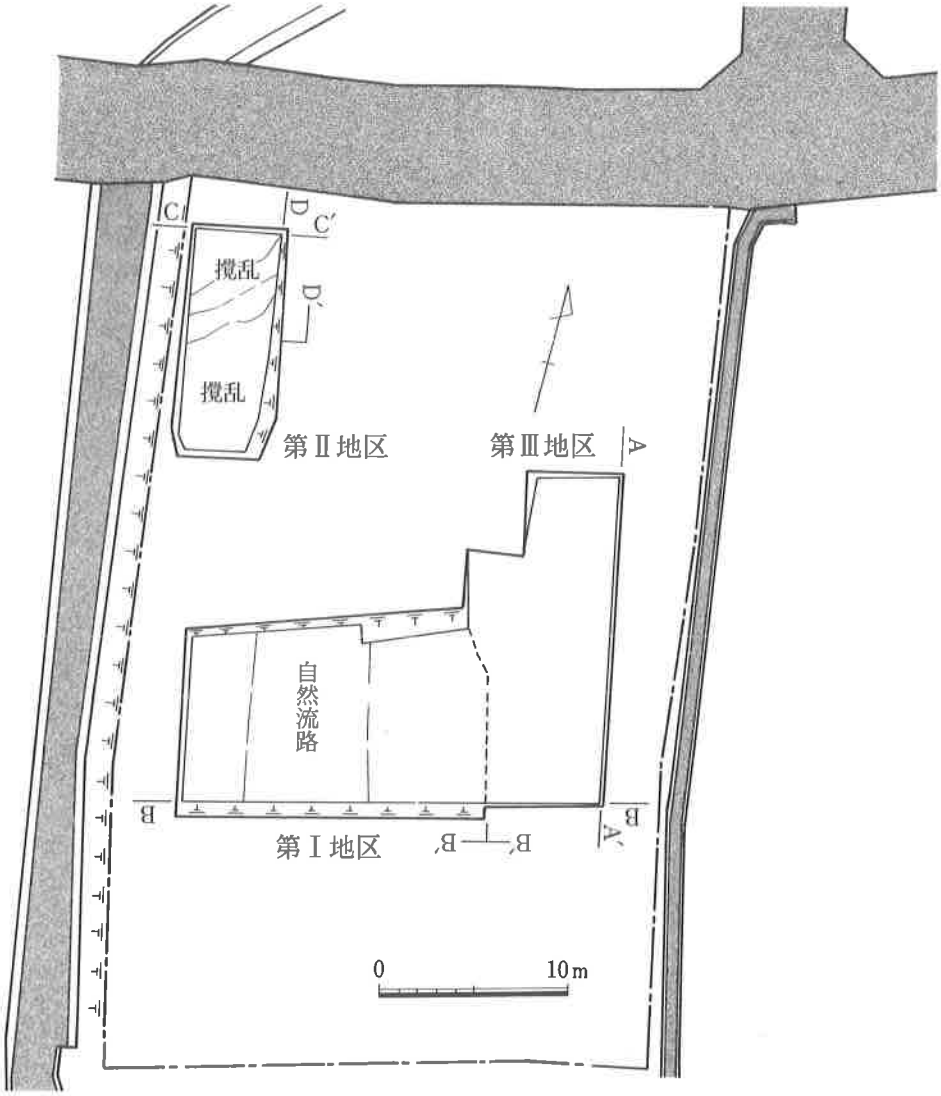
第2図　高田小生水遺跡と周辺の調査地点（1/2,500）

2．遺構と遺物

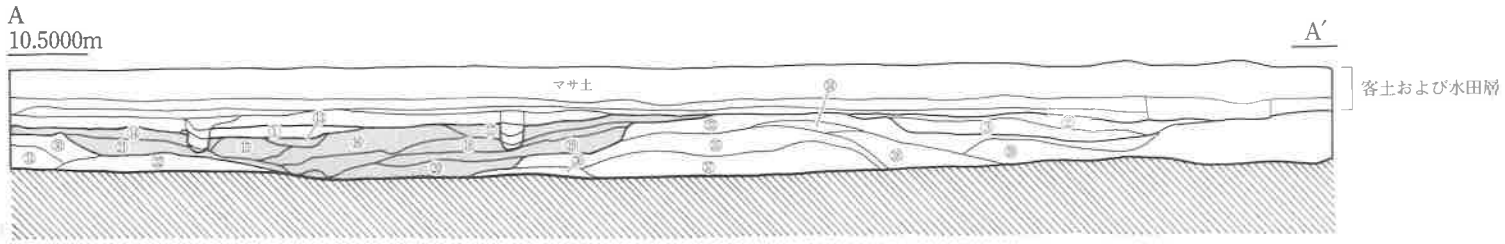
(1) 調査の概要

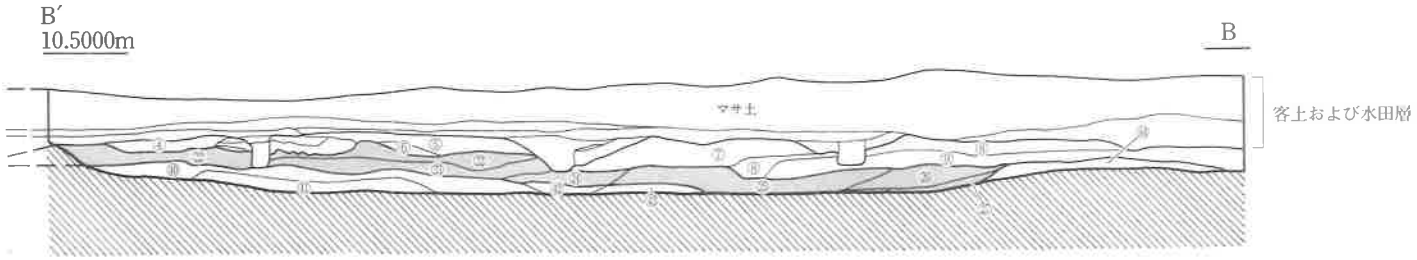
高田小生水遺跡の位置する地区は、小字名を小生水といい地元では地下水量が豊富で水位が高いためこの名がつけられたといわれている。名のとおり調査に当たっては、現地表面から80cmの深さで湧水がみられた。水量は豊富で調査中の8月期に約16時間でおおよそ15ｔの湧水があった。

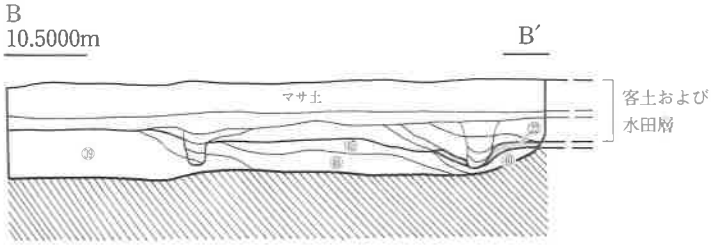
当遺跡は、主に縄文時代晩期から弥生時代初頭における遺物を包含する遺跡である。遺物は自然の河川の流路状をした場所に堆積したものと推測される。河川の堆積層は大きく分けて3層で構成されており、それぞれ、上・中・下層とした（第4図）。上層は、旧水田床土直下の層で主に青灰色の砂層よりなる。中層は、暗褐色の腐植土に主に木片やオニグルミ、イチイガシ、コナラ、クスノキ、モモ、ヤブツバキなどの種実を含む層である。下層は、粗礫層である。湧水は上層からみられるが、中層より下層に向かって水量が増加する。層位は、東から西へ向かって傾斜しており西に当たるⅠ地区では上～下層が観察できるが、東に位置するⅢ地区では上層がほとんど観察できない。

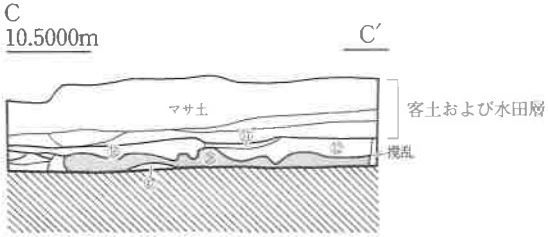


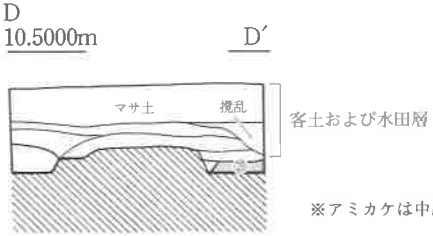
第3図　調査地区（1/400）











※アミカケは中層

0　　4m

①青灰色粘質土（2cm 角の礫まばらに混入）
②青灰色砂質土（2cm 角の礫まばらに混入）
③青灰色砂質土
④青灰色粘質土（灰白色砂混入）
⑤青灰色粘質土（5mm 角の礫・灰白色砂混入）
⑥青灰色粘質土
⑦青灰色砂質土（有機物まばらに混入）
⑧青灰色砂質土（1～3cm 角の炭化物まばらに混入）
⑨灰褐色砂質土
⑩青灰色砂質土
⑪青灰色砂質土（細礫混入）
⑫青灰色砂質土
⑬暗褐色粘質土（砂多く混入）
⑭褐色粘質土（青灰色粘土まばらに混入）
⑮暗褐色粘質土（有機物混入）
⑯暗褐色粘質土（有機物・砂混入）
⑰褐色粘質土（青灰色粘土まばらに混入）
⑱暗褐色粘質土（有機物・砂多く混入）
⑲青灰色砂層
⑳青灰色粗砂層
㉑暗褐色粘質土
㉒暗褐色粘質土（有機物多く混入）
㉓灰褐色粘質土（灰白色砂混入）
㉔暗褐色粘質土
㉕暗褐色粘質土（木実・木葉・木皮などの有機物多く混入）
㉖暗褐色粘質土（木実・木葉・木皮などの有機物多く混入
粗砂と粘質土が互層をなす）
㉗暗褐色粘質土（木実・木葉・木皮などの有機物多く混入）
㉘暗褐色粘質土（木実・木葉・木皮などの有機物多く混入）
㉙暗褐色粘質土（木実・木葉・木皮などの有機物多く混入）

上　層

中　層

㉚青灰色シルト
㉛茶色粗砂（まばらに青灰色シルト混入）
㉜青灰色シルト（1cm 角の礫多く混入）
㉝青灰色シルト
㉞灰白色砂
㉟青灰色シルト（2cm 角の礫まばらに混入）
㊱黄褐色砂（2cm 角の礫混入）
㊲礫（5cm 角程度）
㊳礫（3cm 角程度）
㊴礫（4cm 角程度）
㊵青灰色砂礫
㊶黄褐色細礫
㊷青褐色シルト
㊸礫（1cm 角程度）
㊹黄褐色細礫
㊺青灰色粗砂
㊻青灰色砂
㊼青灰色シルト

下　層

第4図　土層図（1/100）

遺構は各層とも検出できなかった。遺物の量は下層・上層・中層の順に多く、下層では層を主に構成する礫に混じって土器・石器などが出土する状況が観察された。遺物の残存状況は良好でほとんど風化・磨滅していなかったため、当遺跡からは遺構が確認されなかったものの付近に集落・墓域等の遺跡が存在すると推測される。

なお、調査は調査区と排土置き場の面積比を考慮し、Ⅰ～Ⅲの地区に分けて行うこととした。当初はⅠ地区とⅡ地区を調査し、終了後埋め戻してⅢ地区を調査した。なお、Ⅰ地区とⅢ地区は隣り合わせに接するように設定した。

(2) 第Ⅰ地区

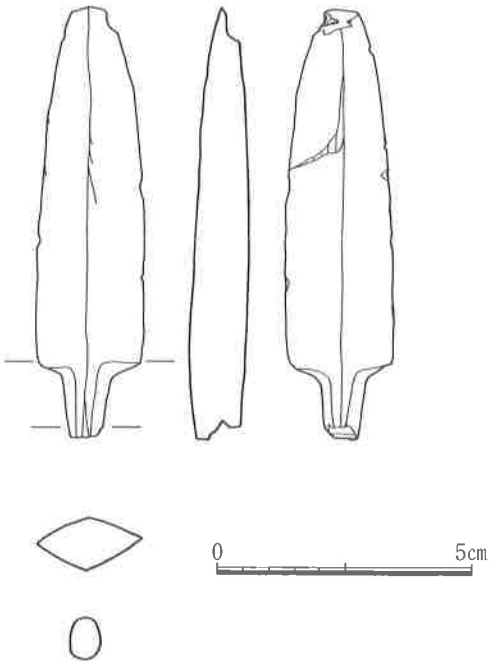
第Ⅰ地区は高田小生水遺跡の西南部に位置する。東西方向中央部付近に向かって低くなる堆積を示している。

上層（第8図）からは、口縁端部に直接刻み目を施す深鉢（2・3)、口縁端部に接する位置に粘土帯を貼付し、ヘラ状の工具により鋭い刻み目を施す深鉢（1)、口縁端部より少し下がった位置に粘土帯を貼付し、棒状工具または指頭によりあまい刺突による刻み目を施すもの（4・5)、口縁端部に鰭状の粘土飾りを貼付するもの（7）が出土している。

中層では、木片・木の葉・種実などの有機物のほかに遺物として、漆器が出土している（第7図3)。緩やかに内湾しており、鉢類と考えられる。

下層（第9図）では、口縁端部に直接刻み目を施す深鉢（4)、口縁端部から少し下がった位置に粘土帯を貼付し、ヘラ状工具で鋭い刻み目を施す深鉢（3)、口縁端部に鰭状の粘土飾りを貼付する深鉢（6）浅鉢（2・7・17)、口縁端部にリボン状の粘土飾りを貼付する深鉢（5）が出土している。うち、鰭状飾りは粘土飾り断面に厚みがあるもの（2・6・7）と薄いもの（17）とに分けられ、厚いものは断面形態がリボン状飾りのものと類似する。

石器は、柳葉形磨製石鏃・打製石斧などが出土した。柳葉形磨製石鏃（第5図）は下層を構成する礫に混入して出土した。遺存状況は良好で鋩部・茎部が一部欠損しているもののほぼ完形である。鎬は鋩から茎にかけて通るが、茎においては甘くなる。刃部は現状の先端部から約1.2cmの位置で角度を変え、鋩を作り出している。体部は鎬から刃部にかけて斜め方向の研ぎを行っている。研ぎは丁寧であるが甘く断面が鋭い菱形にならずやや丸みをもつ。関部はほぼ直角に作り出すが丸みを帯びている。茎部断面の研ぎ出しは六角形を意識しているものの稜がはっきりせず楕円形に近い形状をしている。現存長8.8cm、最大幅2.2cm、最大厚1.1cm、重量は19.6g。頁岩製である。打製石斧（第13図）は2個いずれも土掘具と推定されるものである。6は上面端部を平らに作り出し約



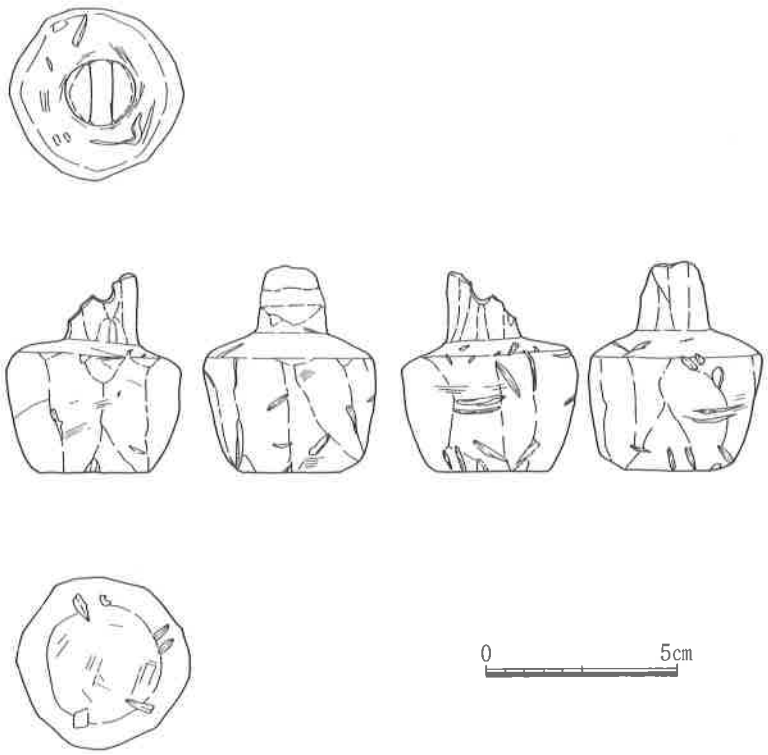
第5図　磨製石鏃（2/3）

5.5cmの位置に屈曲部をもつ。刃部は弧を描くような丸い仕上げをおこなっている。表面下半部は斜め右下がり方向に研磨し、裏面は突出する部分で斜め左下がり方向の研磨を行っている。縦断面は表面に向けて「く」の字状に折れ曲がる形態を呈する。7は上端部を突出させ約4.2cmの位置で屈折し刃部に向かって緩やかに広がる。刃部はほとんどが失われているがかつては緩やかな弧を描いていたと考えられる。表面は横方向の丁寧な研磨、側面は縦方向の研磨を行っている。裏面には長方形の突出部を作り出している。

(3) 第Ⅱ地区

第Ⅱ地区は高田小生水遺跡の北西部に位置する。調査区は南北に長辺をもつ長方形に設定した。南半分と北側一部に近年の開発による攪乱が入っており、調査可能部分は少なかった。堆積層は上層・中層の2層が見られ、下層については攪乱のため検出を断念した。

遺物の出土は上層・中層ともにみられた。上層からは、権状石製品が出土している（第6図）。鈕の先端が一部失われているもののほぼ完形である。滑石製で重量は136.6g。頭部に円柱状の鈕を削り出し、紐通し用の穿孔をおこなう。肩部から底部にかけて縦断面の形態は逆台形を呈している。鈕および、鈕の付け根から肩部にかけての研磨は丁寧で鈕付け根は意識しきれいに研ぎ出している。これに比べ肩部から底部にかけての研磨はやや粗雑で、横断面の形態は歪んだ円形となっている。底部には外方向に向けて4条の沈線が入っている。形態的には古代都城関連遺跡から出土している金属権に類似し、上部欠損部分を考慮すると重量は両換算（1両＝約37.5ｇ）で4両に相当すると考えられる。遺構に伴わず包含層からの出土のため時代の断定はできないが、共伴する遺物から中世まで時代が下がる可能性が考えられる。



第6図　権状石製品（1/2）

下層からは伐採石斧が出土している（第13図5）。上面端部は欠損しているが下半部はほぼ完形である。側面および上半部は敲打を行っており下半部はこれを磨り消している。

(4) 第Ⅲ地区

第Ⅲ地区は高田小生水遺跡の南東部に位置する。調査区は南北に細長い長方形に設定した。堆積状況は北方向が低く南に向かって上がって行くのが観察でき、北方向では上～下層まで確認できるが南では下層しかみられなかった。このため遺物の出土は各層で確認されたものの上・中層は少なく下層から多くあった。

上層からは打製石鏃が出土している（第13図1）。基部を浅く抉る凹基式の中型の石鏃である。

下層からは漆塗土器（第7図）および各器種の底部、口縁部（第10～12図）が出土している。完形はない。

漆塗土器1は浅鉢の体部で屈曲部にリボン状の粘土飾りを貼付している。内外面共に横方向の丁寧なミガキを行った後に漆を施している。漆は外面にのみ塗られリボン状飾りから上部の残りが良好である。2は浅鉢の口縁部で口縁内側に段を有する。体部には穿孔がみられ漆は内外両面に施されている。漆の残存状況は良好である。この他に漆塗土器片が1点出土したが小片のため図化していない。

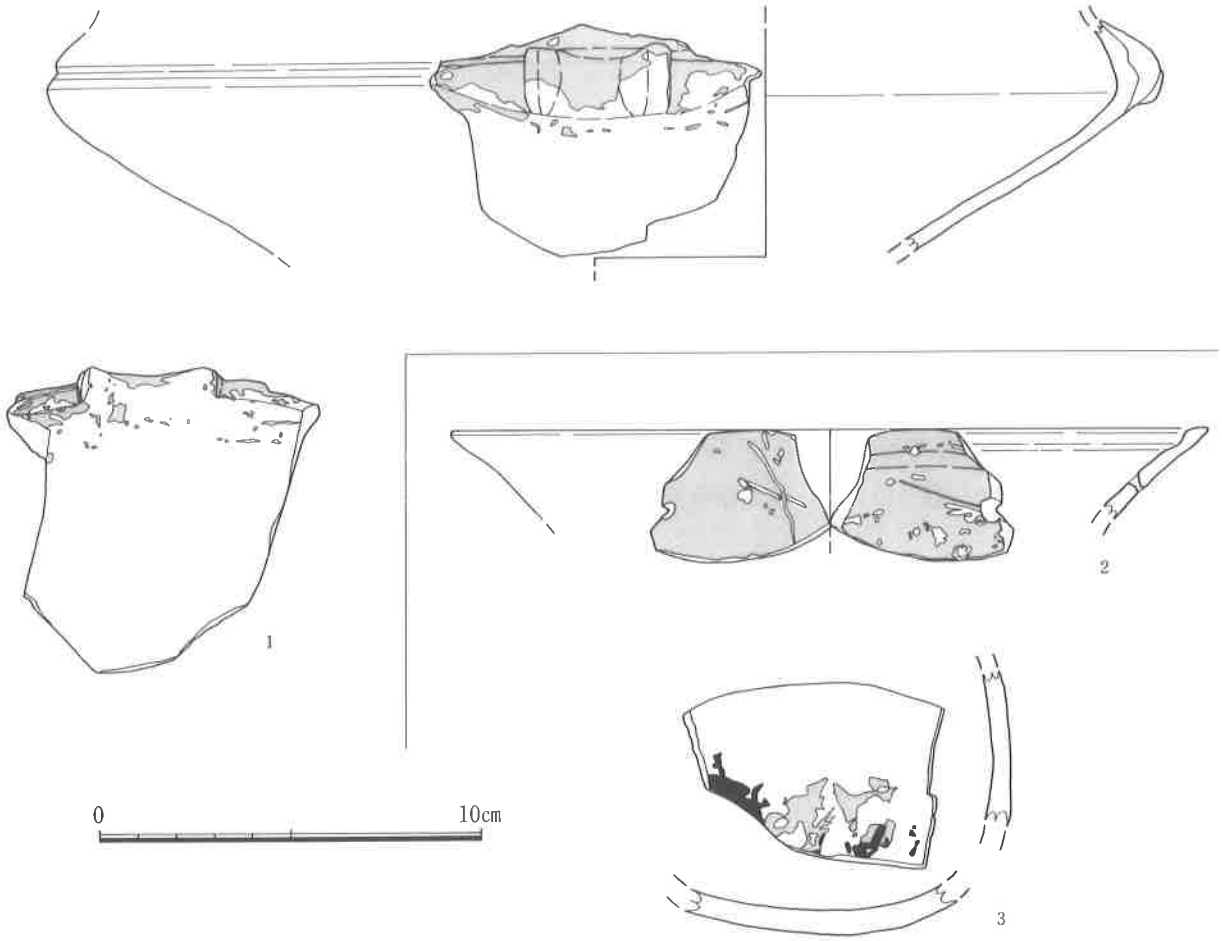
底部（第10図）は、浅鉢と深鉢がある。このうち、浅鉢には高台状の上底を呈するもの（1・3）が存在し他の平底のものと比較し古式の様相を呈する。深鉢は、基本的に外反し端部を丸く収める厚底であるが、8のように上底のものもある。深鉢底部のうち、2は底部屈折部に1条の突帯を貼付し細い棒状工具を押し当てて刻み目を施している。黒川式～突帯文期に至る時期の過渡的な土器であると考えられる。

口縁部（第11・12図）には深鉢・浅鉢・鉢がある。19は高田小生水遺跡出土遺物中最古に属する遺物である。器面の剥落は激しいが磨消縄文を施した鉢の体部で鐘崎式に相当するものと考えられる。刻み目をもつ土器には次のものがある。口縁端部に直接刻み目を施す（27～36）、口縁端部に接する位置に粘土帯を貼付し、ヘラ状工具により鋭い刻み目を施す（53）、口縁端部より少し下がった位置に粘土帯を貼付し棒状工具または指頭により甘い刺突による刻み目を施す（20・24・43・45・49・54）、ヘラ状工具による鋭い刻み目を施す（37・38・41・44・51・53）ものがある。このうち20と24は刻み目突帯に加えて鰭状およびリボン状の粘土飾りをもつもので、黒川式期から突帯文期の移行期に属するものと考えられる。この他に口縁端部にリボン状の粘土飾りを貼付するもの（25・26）、鰭状の粘土飾りを貼付するもの（23）、口縁端部上面に刺突文を施すもの（39・40）、朝鮮系無土器の甕にみられる手法である口縁端部から少し下がった位置に穿孔を行うもの（57）がある。

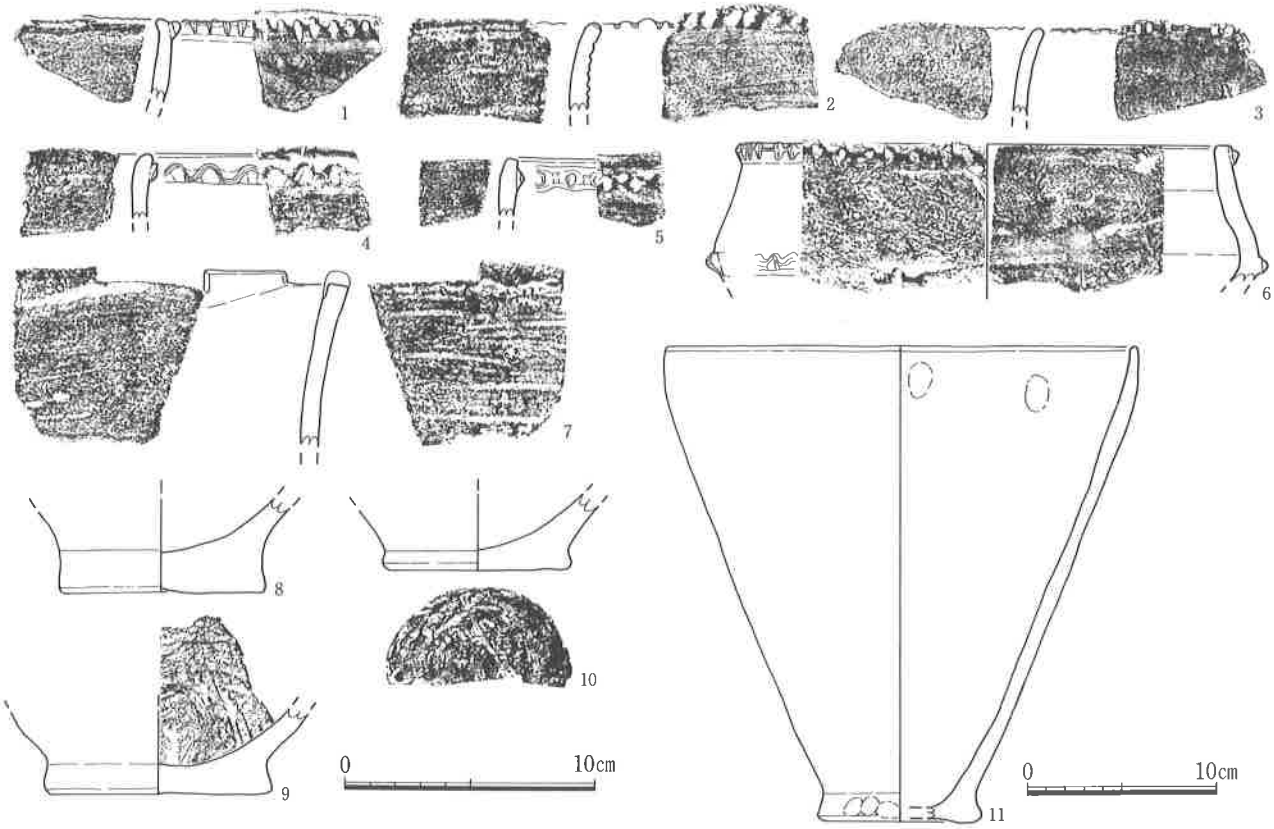
石器は削器、扁平片刃石斧、伐採石斧が出土している（第13図2～4）。削器（2）は表面の中央付近に原礫面を残す。やや粗い作りである。扁平片刃石斧（3）は、上面端部を欠損しているものの下半部は完形である。上面端部から刃部に向かっては一直線であり全体は長方形を呈する。伐採石斧は大型品で、裏面のほぼ半分が欠損している。側面から上半分にかけて敲打痕が残り、下半部は斜め方向、刃部は横方向の研磨を施している。

参考文献

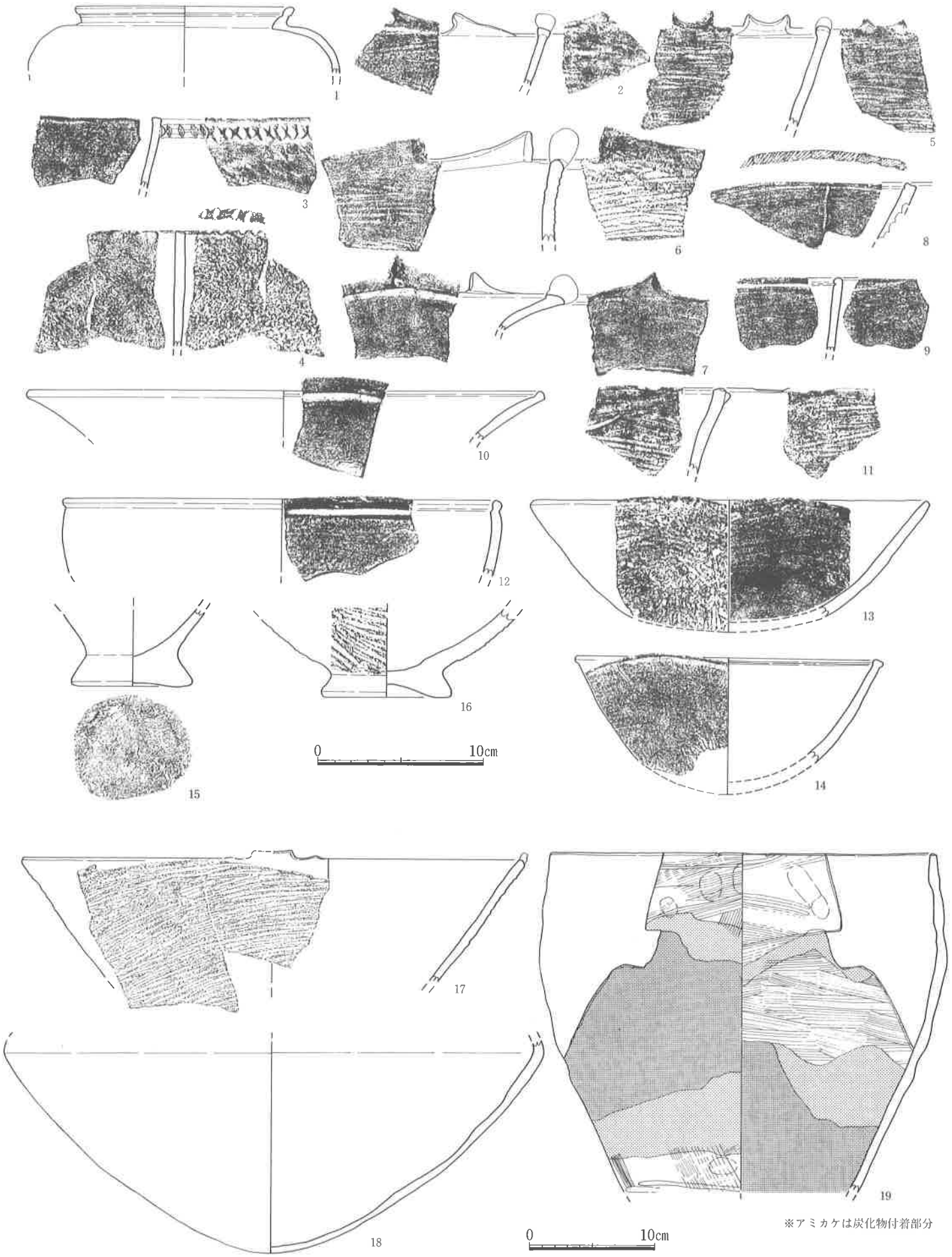
中井　公「平城京から出土した「はかりのおもり」をめぐって」（森　浩一編『考古学と生活文化』1992年）。
吉村靖徳「権衡に関する一考察」（九州歴史資料館編『九州歴史資料館研究論集20』1995年）。



第7図　漆器および漆塗土器（1/2）

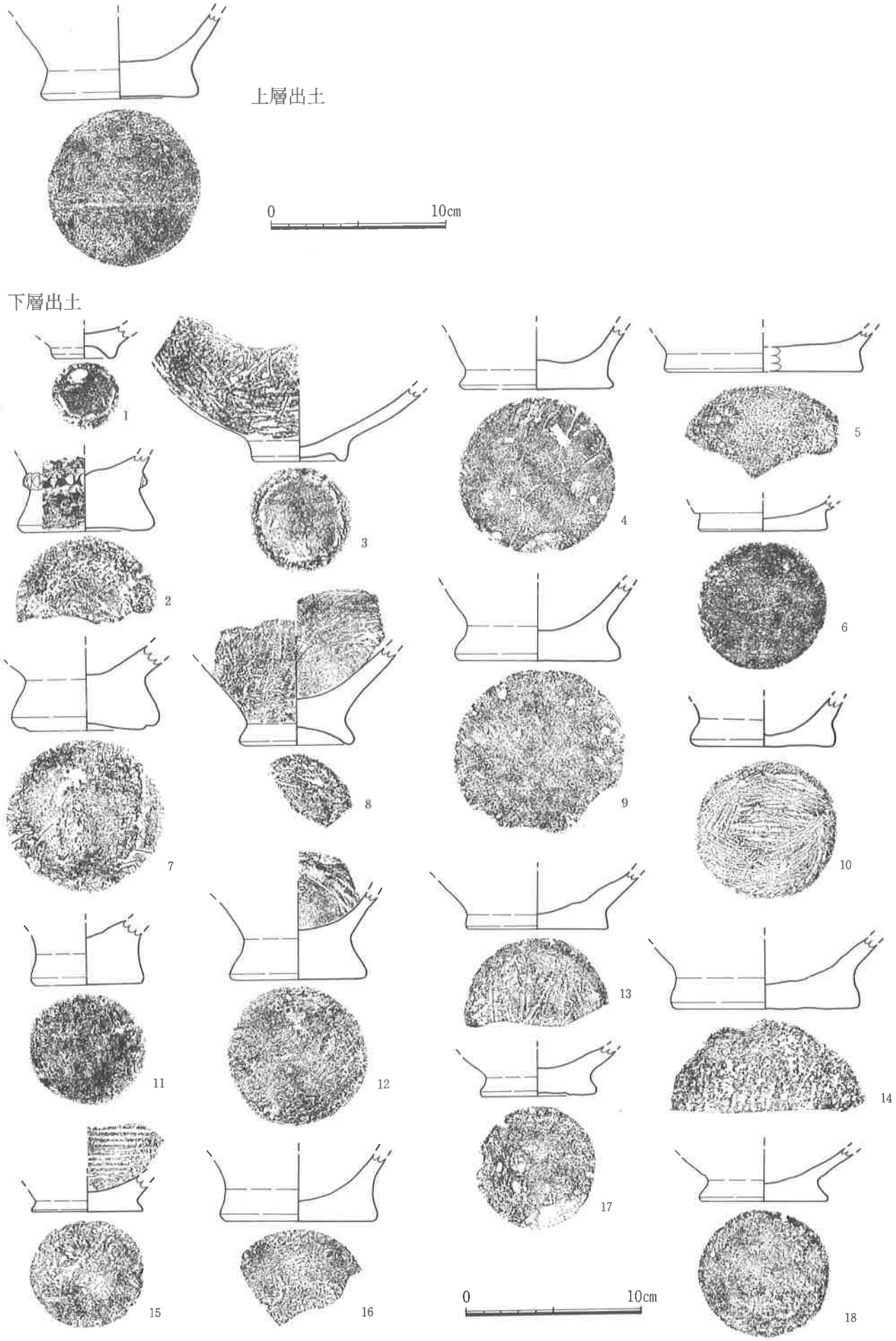


第8図　第Ⅰ地区上層出土遺物（1～10は1/3，11は1/4）

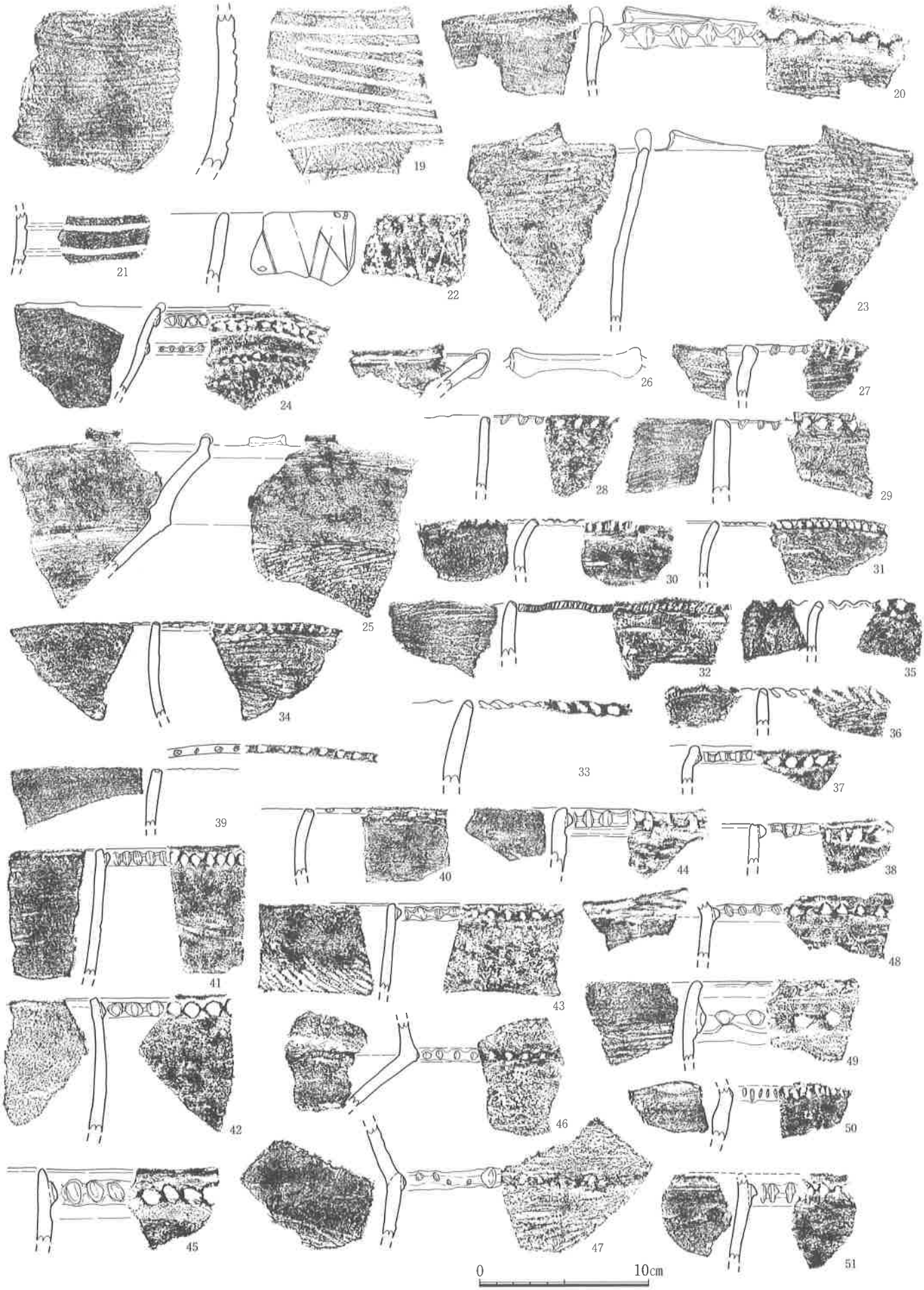


※アミカケは炭化物付着部分

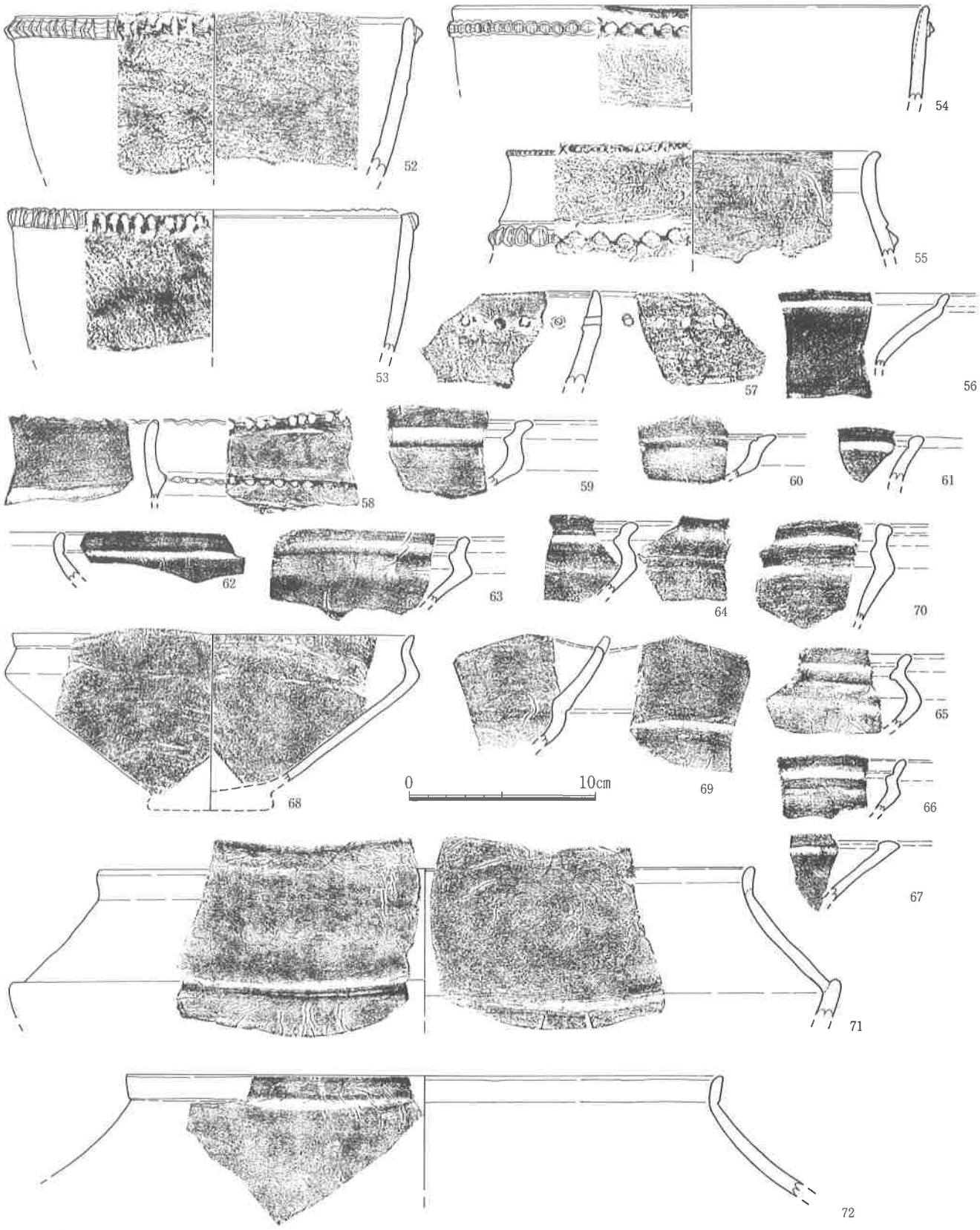
第9図　第Ⅰ地区下層出土遺物（1～14は1/3，17～19は1/4）



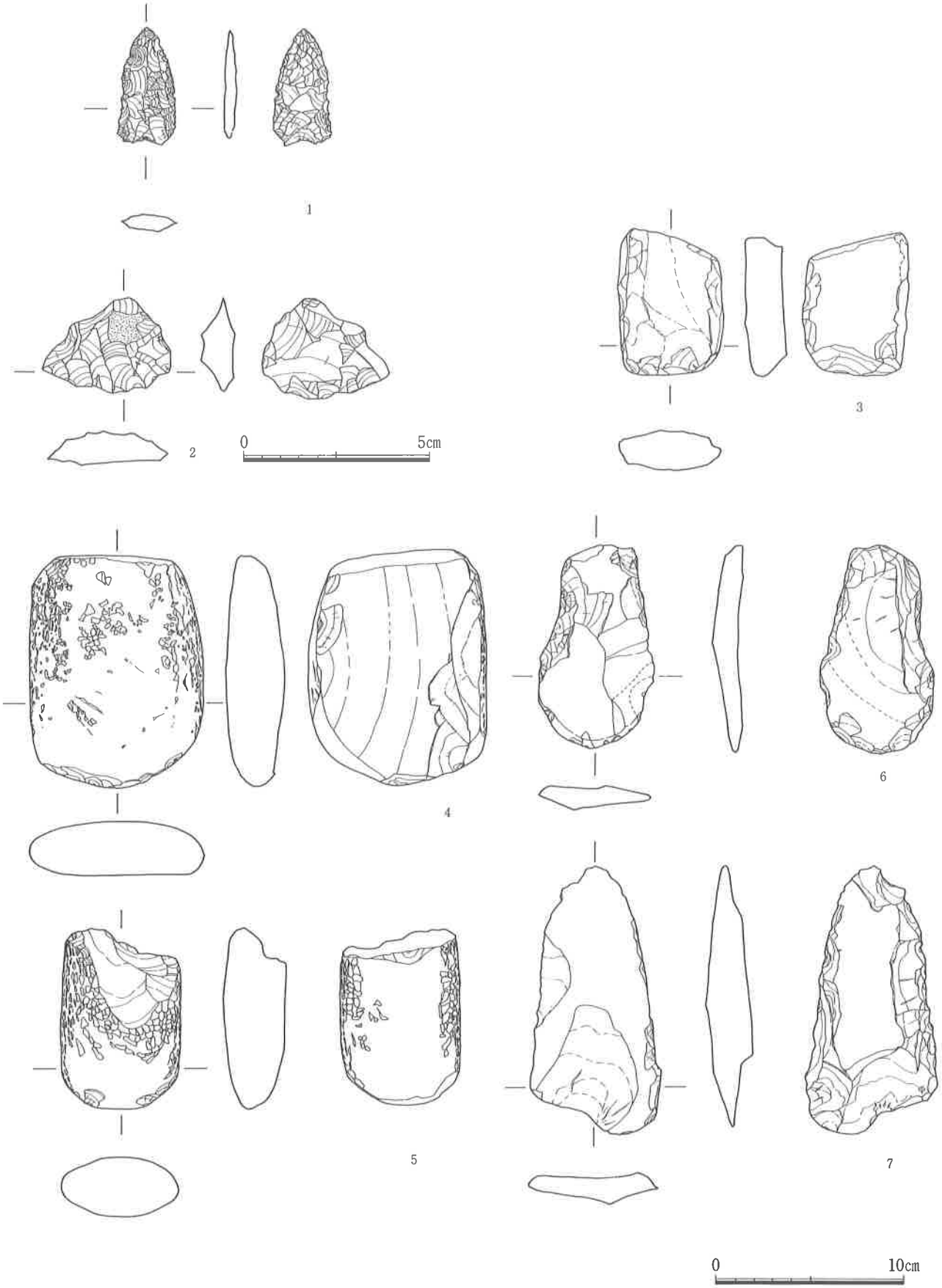
第10図　第Ⅲ地区上層および下層出土遺物（1/3）



第11図　第Ⅲ地区下層出土遺物（1/3）



第12図　第Ⅲ地区下層出土遺物（1/3）



第13図　石器（1・2は2/3，3～7は1/3）

第1表　出土土器一覧表

挿図番号	地区	層序	器種	部位	文様および調整 外面	文様および調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	焼成	備考
8—1	Ⅰ	上層	深鉢	口縁部	口縁端部は突帯を貼付した後横ナデ。突帯直下を横ナデし、体部にかけて右上がりの条痕調整。	横ナデ	長石・石英を少量含む。	暗灰褐色	褐色	やや不良	外面にスス付着
8—2	Ⅰ	上層	深鉢	口縁部	口縁端部に刻み目。口縁下から横方向の条痕調整。	横ナデ	長石・石英を含む。	灰褐色	褐色	良好	
8—3	Ⅰ	上層	浅鉢	口縁部	口縁端部に刻み目。口縁下から横方向のミガキ	横方向のミガキ	長石・雲母を少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	内面に炭化物付着
8—4	Ⅰ	上層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、端部から少し下がった位置に突帯を貼付。小片のため調整不明。	小片のため調整不明。	長石・石英を含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
8—5	Ⅰ	上層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、突帯の下から横方向の条痕調整の後、ナデをおこなっている。	横ナデ	長石を含む。	灰褐色	暗灰褐色	良好	
8—6	Ⅰ	上層	深鉢	口縁部	口縁部を面取りし端部に接する部分と体部屈曲部の2箇所に突帯を貼付。器面調整不明。	ナデ調整。	長石・石英を含む。	灰褐色	褐色	良好	外面にスス付着。
8—7	Ⅰ	上層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、鰭状の粘土を貼付。横方向の条痕調整。	横方向の擦過。	長石・石英を含む。	褐色	褐色	良好	
8—8	Ⅰ	上層	深鉢	底部	横ナデ	横方向の条痕調整	長石・石英を含む。	明褐色	暗灰褐色	良好	
8—9	Ⅰ	上層	深鉢	底部	横ナデ	横方向の条痕調整	長石・石英を含む。	明褐色	暗灰褐色	良好	
8—10	Ⅰ	上層	深鉢	底部	左上がりの条痕調整の後、ナデ。	条痕調整	長石含む。	明灰褐色	明灰褐色	良好	
8—11	Ⅰ	上層	深鉢	口縁～底部	体部は器面剥落のため観察できず。底部は横ナデ。指頭圧痕が連続。	器面剥落のため観察できず。	長石・石英を含む。	明褐色	暗灰褐色	良好	内面に炭化物付着
9—1	Ⅰ	下層	浅鉢	口縁～肩部	横方向のミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英・雲母少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	外面にわずかに丹塗りの痕跡が残る。
9—2	Ⅰ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部に鰭状の粘土貼付。横方向の条痕調整の後、ナデ。	横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	褐色	褐色	良好	
9—3	Ⅰ	下層	深鉢	口縁部	口縁部を面取りし、端部から少し下がった位置に突帯を貼付。突帯の上下はナデを行う。体部にかけて右下がりの条痕調整の後ナデ。	横方向のナデ。指頭圧痕が見られる。	長石を含む。	褐色	褐色	良好	外面にスス付着。
9—4	Ⅰ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、刻み目を施す。調整は器面剥落のため観察できず。	ナデ調整。指頭痕が多数見られる。	長石・雲母を少量含む。	茶褐色	暗茶褐色	良好	
9—5	Ⅰ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部にリボン状の粘土貼付。横方向の条痕調整	横方向の条痕調整	長石・石英を含む。	褐色	褐色	良好	
9—6	Ⅰ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部に鰭状の粘土貼付。横方向の条痕調整。	横方向の条痕調整	長石・石英を含む。	暗灰褐色	暗灰褐色	良好	
9—7	Ⅰ	下層	高坏	口縁部	横方向のミガキ。	口縁端部に粘土帯、リボン状突起貼付。横方向のミガキ。	長石・石英を少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
9—8	Ⅰ	下層	埦	口縁部	口縁端部を面取りし貝殻腹縁文(アナダラ属)を施す。横方向のミガキ。	口縁に一条の沈線。横方向のミガキ。	長石を含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
9—9	Ⅰ	下層	埦	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に一条の沈線。横方向のミガキ。	長石を含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
9—10	Ⅰ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を押さえ面取りする。左上がりのミガキ。	口縁に一条の沈線を施す。横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
9—11	Ⅰ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、指頭押圧をおこなう。横方向の条痕調整。	口縁部は横方向のナデ。以下は横方向の条痕調整。	長石・石英を含む。	暗灰褐色	灰褐色	良好	外面にスス付着
9—12	Ⅰ	下層	埦	口縁部	口縁部端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に一条の沈線。横方向のミガキ。	長石・雲母を少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
9—13	Ⅰ	下層	埦	口縁部	口縁端部を丸く作る、横方向の粗いミガキ風擦過。	横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	暗灰褐色	黒褐色	やや不良	
9—14	Ⅰ	下層	埦	口縁部	口縁部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁部にあまい沈線を施す。横方向のミガキ。	長石・石英を少量含む。	灰褐色	黒褐色	良好	
9—15	Ⅰ	下層	深鉢	底部	横方向の擦過。やや上げ底。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	褐色	褐色	やや不良	内面にスス付着。
9—16	Ⅰ	下層	浅鉢	底部	横方向の条痕調整。上げ底。	板状工具による縦方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	茶褐色	灰褐色	良好	内面に炭化物付着
9—17	Ⅰ	下層	浅鉢	口縁～底部	横方向の条痕調整。口縁部に鰭状の粘土貼付。	横方向のミガキ。	長石・石英含む。	灰褐色	灰褐色	良好	

挿図番号	地区	層序	器種	部位	文様および調整			色調		焼成	備考
					外面	内面	胎土	外面	内面		
9—18	Ⅰ	下層	浅鉢	体～底部	横方向のミガキ。底部丸底。	横方向のミガキ。外面に比べやや粗い。	長石・石英を少量含む。	黒褐色・灰褐色	黒褐色	良好	
9—19	Ⅰ	下層	深鉢	口縁～体部	口縁部は丸く収め、刻み目を施す。横方向の条痕調整。	横方向の条痕調整。	長石・石英を大量に含む。	灰褐色	灰褐色	不良	内・外面にススおよび炭化物の付着。
10	Ⅲ	上層	深鉢	底部	左上がりの擦過。	横方向の擦過。	長石を含む。	灰褐色	褐色	良好	内面に炭化物付着。
10—1	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	高台状に粘土貼付。ミガキ。	ミガキ。	長石・石英を少量含む。	褐色	黒褐色	良好	
10—2	Ⅲ	下層	深鉢	底部	底部くびれ部に断面三角形の粘土帯を貼付し刻み目を施す。底面はやや上げ底。	調整不明。	長石・石英・雲母含む。	明灰褐色	灰褐色	良好	
10—3	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	高台状に粘土貼付。横方向の条痕調整。	横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	黒褐色	良好	
10—4	Ⅲ	下層	深鉢	底部	ナデ調整。	左上がりの条痕調整。	長石・石英含む。	灰褐色	灰褐色	良好	内面にスス付着。
10—5	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	ナデ調整。	調整不明。	長石・石英含む。	明灰褐色	明灰褐色	不良	
10—6	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	横方向のミガキ。	ミガキ。	長石・石英を少量含む。	黒褐色	灰褐色	良好	
10—7	Ⅲ	下層	深鉢	底部	ナデ調整。底面に製作途中の粘土層付着。やや上げ底。	擦過。	長石・石英・雲母を大量に含む。	褐色	灰褐色	良好	
10—8	Ⅲ	下層	深鉢	底部	縦および横方向の擦過。底面上げ底。	横方向の擦過。	長石・石英含む。	茶褐色	灰褐色	良好	
10—9	Ⅲ	下層	深鉢	底部	縦方向の擦過および横方向のナデ。	擦過。	長石・石英含む。	茶褐色	褐色	良好	
10—10	Ⅲ	下層	深鉢	底部	底面に条痕調整。	条痕調整	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	茶褐色	良好	
10—11	Ⅲ	下層	深鉢	底部	ナデ。	調整不明。	長石・石英含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
10—12	Ⅲ	下層	深鉢	底部	横方向の条痕調整。	横方向の条痕調整。	長石・石英・雲母含む。	茶褐色	黒褐色	良好	
10—13	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	底面に条痕調整。	粗いミガキ。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	不良	
10—14	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	底面に粗い条痕調整。	調整不明。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	不良	
10—15	Ⅲ	下層	深鉢	底部	ナデ調整。指頭痕が見られる。	条痕調整	長石・石英含む。	茶褐色	灰褐色	良好	
10—16	Ⅲ	下層	深鉢	底部	ナデ調整。	条痕調整	長石・石英含む。	褐色	黒褐色	良好	内面にススおよび炭化物付着。
10—17	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	横方向の擦過。やや上げ底。	不明。	長石・石英含む。	茶褐色	灰褐色	やや不良	
10—18	Ⅲ	下層	浅鉢	底部	横方向の条痕調整。	横方向のミガキ。	長石・石英含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
11—19	Ⅲ	下層	鉢	体部	磨消縄文。	横方向の条痕調整。	長石・石英・角閃石を多く含む。	褐色	黒褐色	良好	
11—20	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め鰭状の粘土および刻み目突帯を貼付。横方向の条痕調整。		長石・石英・雲母含む。	黒褐色	灰褐色	良好	内外面にスス付着。
11—21	Ⅲ	下層	浅鉢	体部	2条の沈線を施す。	横方向のミガキ。	長石・石英含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
11—22	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	ヘラ描きの鋸歯文状文様。	横方向のナデ。	長石・石英・雲母を多く含む。	灰褐色	灰褐色	不良	
11—23	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし鰭状の粘土を貼付。横方向の条痕調整。	横方向の条痕調整。	長石・石英含む。	褐色	灰褐色	良好	内外面にスス付着。
11—24	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁～体部	口縁端を丸く収めリボン状の粘土を貼付。口縁部から少し下がった位置に２条の突帯を貼り付け、刺突による刻み目を施す。	横方向のミガキ。	長石・石英含む。	灰褐色	灰褐色	やや不良	
11—25	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁～体部	口縁端を丸く作りリボン状の粘土を貼付。口縁部から屈曲部までは横方向のミガキ。以下は右上がりの条痕調整。	横方向のミガキ。	長石・石英含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
11—26	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作り、鰭状の粘土を貼付。横方向のナデ。	鰭状の粘土の直下に1条の沈線を施す。	長石・石英含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
11—27	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を押さえ面取りし肥厚させた部分にヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母少量含む。	褐色	黒褐色	良好	
11—28	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、ヘラ状工具による刻み目を施す。	調整不明。	長石・石英含む。	褐色	褐色	やや不良	
11—29	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、ヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英含む。	灰褐色	黒褐色	良好	
11—30	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を押さえ面取りし肥厚させヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	調整不明。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	やや不良	外面にスス付着。
11—31	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部面取りし、ヘラ状工具による刻み目を施す。横方向のミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	

挿図番号	地区	層序	器種	部位	文様および調整		胎土	色調		焼成	備考
					外面	内面		外面	内面		
11—32	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を押さえ波状にし、棒状工具による刻み目を施す。横方向の条痕調整。	横方向の擦過。	長石・石英含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
11—33	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、斜め方向の刻み目をヘラ状工具で施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	暗褐色	灰褐色	やや不良	
11—34	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作り、斜め方向の刻み目をヘラ状工具で施す。横方向ミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
11—35	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を押さえ波状にし、棒状工具による刻み目を施す。	調整不明。	長石・石英含む。	灰褐色	褐色	良好	
11—36	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、斜め方向の刻み目をヘラ状工具で施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
11—37	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、少し下がった位置に突帯を貼付し、刺突による刻み目を施す。	調整不明。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	良好	外面にスス付着。
11—38	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、接して突帯を貼付しヘラ状工具で刻み目を施す。	横方向の擦過。	長石・石英含む。	明褐色	明褐色	良好	
11—39	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、端部上面に棒状工具による刺突文を施す。	調整不明。	石英・雲母を少量含む。	灰褐色	黒褐色	良好	
11—40	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、端部上面に棒状工具による刺突文を施す。器面ミガキ調整の後白色の化粧土を塗る。	横方向のミガキ。	石英・雲母を少量含む。	灰白色	灰褐色	良好	
11—41	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、少し下がった位置に突帯を貼付し、刺突による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	灰褐色	良好	
11—42	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、少し下がった位置に突帯を貼付し、刺突による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	褐色	良好	
11—43	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、少し下がった位置に突帯を貼付し、刺突による刻み目を施す。横方向の擦過。	左上がりの条痕調整。口縁部は条痕調整の後ナデ。	長石・石英・雲母含む。	暗褐色	暗褐色	良好	
11—44	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を面取りし、接して突帯を貼付し、ヘラ状工具で刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向のナデ。	長石・石英・雲母含む。	茶褐色	茶褐色	良好	
11—45	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、少し下がった位置に突帯を貼付し、刺突による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
11—46	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	屈曲部にヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	黒褐色	やや不良	
11—47	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	屈曲部に指頭による刻み目を施す。横方向の条痕。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	黒褐色	不良	
11—48	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼付し、ヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	良好	外面にスス付着。
11—49	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を押さえ面取りする。下がった位置に突帯を貼付し、指頭による刻み目を施す。横方向のナデ。	横方向の擦過。	長石・石英含む。	灰褐色	黒褐色	やや不良	
11—50	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部から下へ向かってヘラ状工具による細い刻み目を施す。横方向のナデ。	横方向のナデ。	長石・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
11—51	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼付し、ヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
12—52	Ⅲ	下層	深鉢	口縁～体部	口縁端部を丸く収め、少し下がった位置に突帯を貼付する。ヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の条痕調整。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	外面にスス・炭化物付着。
12—53	Ⅲ	下層	深鉢	口縁～体部	口縁端部を丸く収め、接して突帯を貼付する。棒状工具による刺突を施す。左上がりの条痕調整。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	内外面にスス・炭化物付着。

挿図番号	地区	層序	器種	部位	文様および調整		胎土	色調		焼成	備考
					外面	内面		外面	内面		
12—54	Ⅲ	下層	深鉢	口縁～体部	口縁端部を丸く収め、少し下がった位置に突帯を貼付する。ヘラ状工具による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英含む。	暗褐色	暗褐色	良好	外面にススス・炭化物付着。
12—55	Ⅲ	下層	深鉢	口縁～体部	口縁端部を押さえ肥厚させヘラ状工具による刻み目、体部に突帯を貼付し刺突による刻み目を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	暗褐色	黒褐色	良好	外面にススス・炭化物付着。
12—56	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作り、1条の沈線を施す。横方向のミガキ。	口縁部に1条の沈線。横方向のミガキ。	長石を少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—57	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収め、1.5cm下の位置に焼成前外面から内面に向かって穿孔を施す。横方向の擦過。	横方向の擦過。	長石・石英を大量に含む。	灰褐色	灰褐色	良好	孔列文土器
12—58	Ⅲ	下層	深鉢	口縁部	口縁端部を丸く収めヘラ状工具による刻み目、体部屈曲部に刺突による刻み目を施す。横方向のナデを行っており、指紋が観察される。	横方向の擦過。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	灰褐色	良好	
12—59	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に断面三角形の粘土帯を貼付。横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—60	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に断面三角形の粘土帯を貼付。横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—61	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁部に1条の沈線を施す。横方向のミガキ。	長石・石英・雲母含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—62	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作り、1条の沈線を施す。横方向のミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英を少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—63	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に浅い沈線を施す。横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—64	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に浅い沈線を施す。横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—65	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に断面三角形の粘土帯を貼付。横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	褐色	黒褐色	良好	
12—66	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に粘土帯を貼付。横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—67	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	横方向のミガキ。	口縁部に1条の沈線を施す。横方向のミガキ。	長石・石英を少量含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—68	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁～体部	口縁端部を丸く作り、1条のあまい沈線を施す。条痕調整の後ミガキを行っており、下半部に条痕残る。	横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	灰褐色	灰褐色	良好	
12—69	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁～体部	波状口縁を呈する。横方向のミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英を少量含む。	褐色	褐色	良好	
12—70	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作る。横方向のミガキ。	口縁に断面三角形の粘土帯を貼付。横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	褐色	黒褐色	良好	
12—71	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁～体部	口縁端部を丸く作り、1条の沈線を施し、屈曲部にも1条の沈線を施す。横方向のミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	黒褐色	黒褐色	良好	
12—72	Ⅲ	下層	浅鉢	口縁部	口縁端部を丸く作り、1条の沈線を施す。横方向のミガキ。	横方向のミガキ。	長石・石英を含む。	黒褐色	黒褐色	良好	

第2表　出土石器一覧表

挿図番号	地区	層序	器種	石材	長さ(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状態
13—1	Ⅲ	上層	石鏃	黒曜石	3.3	1.5	0.3	1.9	完形
13—2	Ⅲ	下層	削器	黒曜石	2.5	3.5	0.9	6.9	完形
13—3	Ⅲ	下層	扁平片刃石斧	玄武岩	7.7	5.6	2.1	152	基部欠損
13—4	Ⅲ	下層	伐採石斧	砂岩	12.5	9.5	3.2	350	1/2面欠損
13—5	Ⅱ	下層	伐採石斧	砂岩	9.7	6.5	3.4	630	基部欠損
13—6	Ⅰ	下層	打製石斧	玄武岩	10.9	6.2	1.4	120	完形
13—7	Ⅰ	下層	打製石斧	玄武岩	14.4	7	2.3	245	刃部欠損

3．前原市高田小生水遺跡出土漆塗製品の調査

志賀智史（別府大学附属博物館）
本田光子（別府大学文学部文化財学科）

1．はじめに

前原市高田小生水遺跡出土の縄文時代晩期の漆塗製品について、表面観察と塗膜の断面観察及び赤色顔料の蛍光X線分析を行う機会を得たので、その方法と結果を報告したい。

2．資料

第Ⅰ・Ⅲ地区の下層（黒川式期～突帯文期）より出土した土器3点と、中層より出土した木器1点の合計4点（巻頭図版2-a）であり、いずれも外面ないしは内外面に漆が塗布されている。所属時期は前者が縄文時代晩期の黒川式と考えられる。後者については、供伴遺物はないが上下層に含まれる土器より黒川式期～突帯文期を想定できる。

3．方法

表面観察：残存する資料の表面を裸眼と実体顕微鏡で観察し、器形や漆の塗布範囲（全面か部分的か、文様、色による塗り分け）等を確認する。

断面観察：資料から剥落した塗膜片あるいは直接採取した塗膜片を、エポキシ樹脂に包埋し厚さ数μmになるまで研磨する。完成した試料を透過光及び反射光により光学顕微鏡で観察し、下地や上塗りの状況、その回数、厚さ、顔料の種類等を確認する。特に赤色顔料についてはその形状から朱かベンガラかを経験的に判別した。

赤色顔料の蛍光X線分析：別府大学に設置の(株)堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESA500を用いて資料を直接測定した(条件：15kV-440μA；50秒、50kV-20μA；50秒、大気)。赤色の由来となる主成分元素としてHgが検出された資料1，3，4は朱、Feが検出されHgが検出されなかった資料2はベンガラと考えた。ただし、資料1，3，4からはFeも検出されたが、検出強度が弱いので、胎土や土壌の鉄分に由来すると判断した。

4．調査

①資料1（第7図1、巻頭図版2-a-1）

表面観察：黒川式の浅鉢で、外面にのみ漆が確認できる。胴部上半は赤色の漆が、胴部下半には黒色の漆が認められ、色による塗り分けが行われている（b）。

資料	漆塗部分	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類
1	外面	朱	Hg、Fe	朱
2	内・外面	ベンガラ（P有）	Fe	ベンガラ（P有）
3	外面	朱	Hg、Fe	朱
4	外面	朱	Hg、Fe	朱

第3表　赤色顔料の分析結果

断面観察：素地は土器である。下地はなく、外面にのみ厚さ約5μmの黒色顔料混和漆を（c）、その上に厚さ約25μmと約10μmの赤色顔料混和漆を塗布する（d）。黒色顔料の粒子は1μm以下であり、鉱物を含まずやや凝集した状態であることから、煤を想定している。赤色顔料は二層とも朱であり（第3表）、粒子は5μm以下を中心として最大30μmのものも認められる。

②**資料2**（第7図2、巻頭図版2-a-2）

表面観察：黒川式の浅鉢で口縁部のみが残る。内外面に赤色の漆が塗布されている。

断面観察：素地は土器である（e）。下地はなく、上塗りとして内外面とも厚さ5μm以下の薄い黒色顔料混和漆を、その上に厚さ10～20μmの赤色顔料混和漆を塗布する。黒色顔料は煤を想定している。赤色顔料は内外面ともベンガラであり（第3表）、直径約2μmのパイプ状粒子を含んでいる。

③**資料3**（未図化、巻頭図版2-a-3）

表面観察：黒川式の浅鉢で胴部～頸部付近のみが残る。外面に赤色の漆が塗布されている。

断面観察：素地は土器である（f）。下地はなく、厚さ5μm以下の黒色顔料混和漆を、その上に厚さ10～20μmの赤色顔料混和漆を塗布する。黒色顔料は煤を想定している。赤色顔料は朱であり（第3表）、粒子は5μm以下を中心として最大10μmのものも認められる。

④**資料4**（第7図3、巻頭図版2-a-4）

表面観察：木製の鉢類で、内外面とも漆を塗布している。横木取りで、器壁は残存部分で4～7㎜を計る。内外面(g・h)とも素地が木器(a)で、下地に炭粉(b)を用い、上塗りに漆(c)を塗布している。さらに、外面にのみ赤色の漆(c)で文様を描いている。

断面観察：素地は木器であり、内外面とも下地に厚さ50～120μmの炭粉を塗布する。上塗りとしては厚さ5μm以下の膠着材と、厚さ10～15μmの透明漆を塗布する。これにより結果として表面からは黒色に見える（i）。さらに外面にのみ厚さ5～10μmの赤色顔料混和漆を塗布している（j）。赤色顔料は朱であり（第3表）、粒子は3μm以下で均一である。

5．まとめ

資料2、3の黒色顔料混和漆層は、資料1のそれに極めて類似しているので、資料1と同様に胴部以下に黒色漆の単体の層があった可能性が高い。よって資料1～3は胴部上半が赤色で下半が黒色という同じ意匠を持った浅鉢であったと考えることができる。ただし、その赤色顔料の種類と塗布回数は、資料1が朱を二回、資料2がベンガラを一回、資料3が朱を一回と三者三様であった。

資料4の木地に炭粉を塗り透明漆を塗布後、朱漆で文様を描くという技法は、縄文時代晩期後半（弥生時代早期）～弥生時代前期頃まで確認できる。このような技法は「考古学で文様的に縄文時代の系譜につながらない大陸的文様を持つ漆器群に対応している」（岡田1995）と言われており、出土層より黒川式期～突帯文期と考えられている時期もその技法上の特徴から突帯文期と限定できる可能性が高い。

さて、今回の調査にあたっては、表面観察と断面観察の両面から行った。それは、素地の性質（土器や木器、編み物等）や上塗りの塗布範囲（全面塗布、部分的な塗布、文様を描く）が、下地や漆膜の厚さ、漆の塗布回数に影響を与えるのではないかと考えたためである。今後はこのような観点にたって漆塗製品の継続調査を行いたいと考えている。

〈参考・引用文献〉岡田文男1995『古代出土漆器の研究ー顕微鏡で探る材質と技法ー』京都書院

Ⅲ. 小　結

高田小生水遺跡からは遺構は検出されなかったものの土器、石器をはじめさまざまな種類の遺物が出土した。以下、特徴的なものを取り上げて遺跡の性格について考えて行きたい。

土器

出土したのは縄文時代後期の鐘崎式土器を最古とする土器群である。このうち出土量において中心を占めるのは縄文時代晩期の黒川式から突帯文期のものである。特徴として黒川式土器は、口縁端部にリボン状または鰭状の粘土飾りを貼付するものがみられ、突帯文期の土器には刻み目突帯がみられる。この突帯の施文方法は大きく2種類に分類され、棒状工具または指頭による刺突で甘い刻み目を施すものとヘラ状の工具で鋭い刻み目を施すものとが観察された。従来、前者の土器は後者のものに先行すると解釈されてきた。このことについて今回の調査成果から簡単な考察を加えてみたい。まず、層位によって新旧関係を判断しようと試みると、両タイプとも上層及び下層に混入しており明らかにすることができなかった。そこで、突帯を持つ遺物について個々に観察を加えていくと、若干2点の土器片が黒川式と突帯文期双方の特徴を備えていた。口縁端部に粗雑な鰭状またはリボン状の粘土飾りを貼付し、これに接する位置に甘い刻み目をもつ突帯を施しているもので移行期に属すると考えられる。この遺物から当遺跡における土器は層位的な裏付けは得られなかったものの、黒川式単純期→黒川式から突帯文期への移行期→棒状工具または指頭による甘い刻み目突帯を施す時期→ヘラ状工具による鋭い刻み目を施す時期と変遷していった可能性が考えられる。

柳葉形磨製石鏃

前原市内において柳葉形磨製石鏃は過去に志登支石墓群、三雲加賀石支石墓、井田用会支石墓、長野宮の前遺跡などから出土している。今回出土した柳葉形磨製石鏃は丁寧な研磨を行うなど製作面においては良好だが、その形態は過去の出土例と比較して刃部幅が広く、鋌の作り出しも鋭さに欠け甘く鈍重な印象を受ける。包含層からの出土であるため性格等は明らかでないが、柳葉形磨製石鏃を副葬する遺跡の中では新しい時期に属する遺構に伴ったものと考えられる。

権状石製品

権の出土例は福岡県内では大宰府と博多からが多く、近隣では福岡市西区元岡桑原遺跡からの出土が知られている。元岡桑原遺跡出土の石製権は鈕を作り出さず台形を呈する体部に直接穿孔を施すものであり形態上大きな相違点が見られ、今回の出土例は金属製権を模倣した形態であることが示唆される。包含層からの出土のため時代および性格については明らかでないが、他の出土遺跡の性格および当遺跡の立地から、近くに交易または交通に関する施設が存在した可能性が考えられる。

参考文献

斎藤忠・鏡山猛編『志登支石墓群』（文化財保護委員会、1956年）。
岡部裕俊編『長野川流域の遺跡群Ⅰ』（前原町教育委員会、1989年）。
池田祐司「早良平野の突帯文土器と板付式土器－福岡平野との比較を含めて－」
（土器持寄会論文集刊行会『突帯文と遠賀川』2000年）。

図　　版

a．遺跡全景（東から第Ⅰ地区・Ⅱ地区）

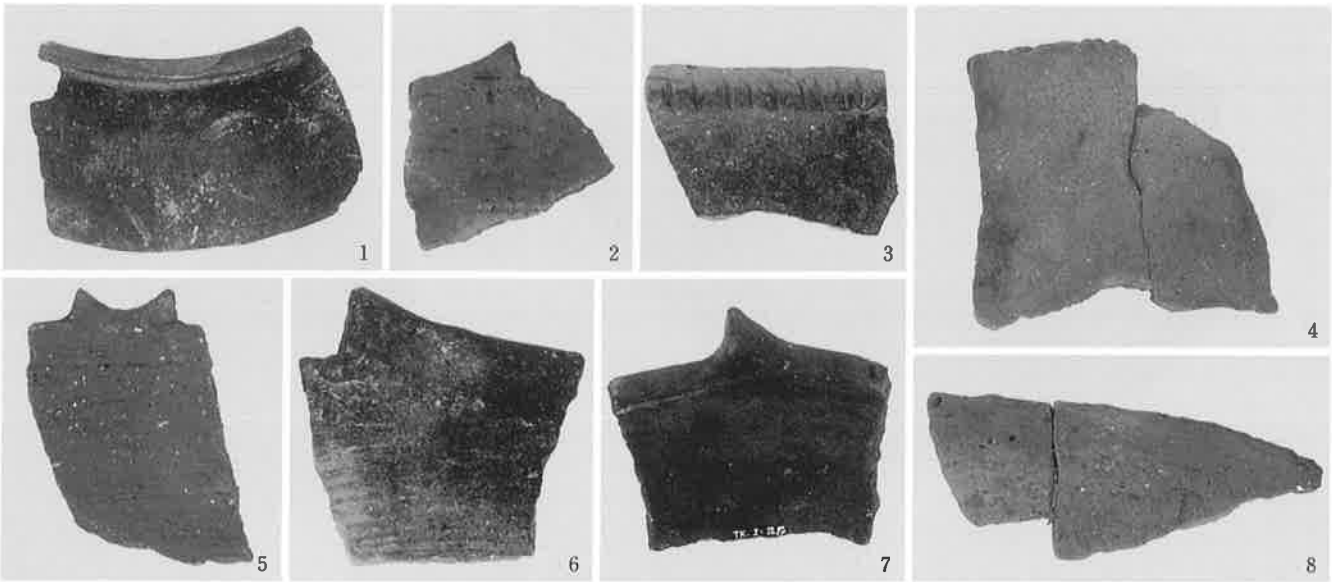
b．第Ⅰ地区全景（東から）

図版2

a. 第Ⅱ地区全景（東から）

b. 第Ⅲ地区全景（北から）

a. 第Ⅰ地区上層出土遺物



b. 第Ⅰ地区下層出土遺物

図版4

9

10

11

12

13

16

14

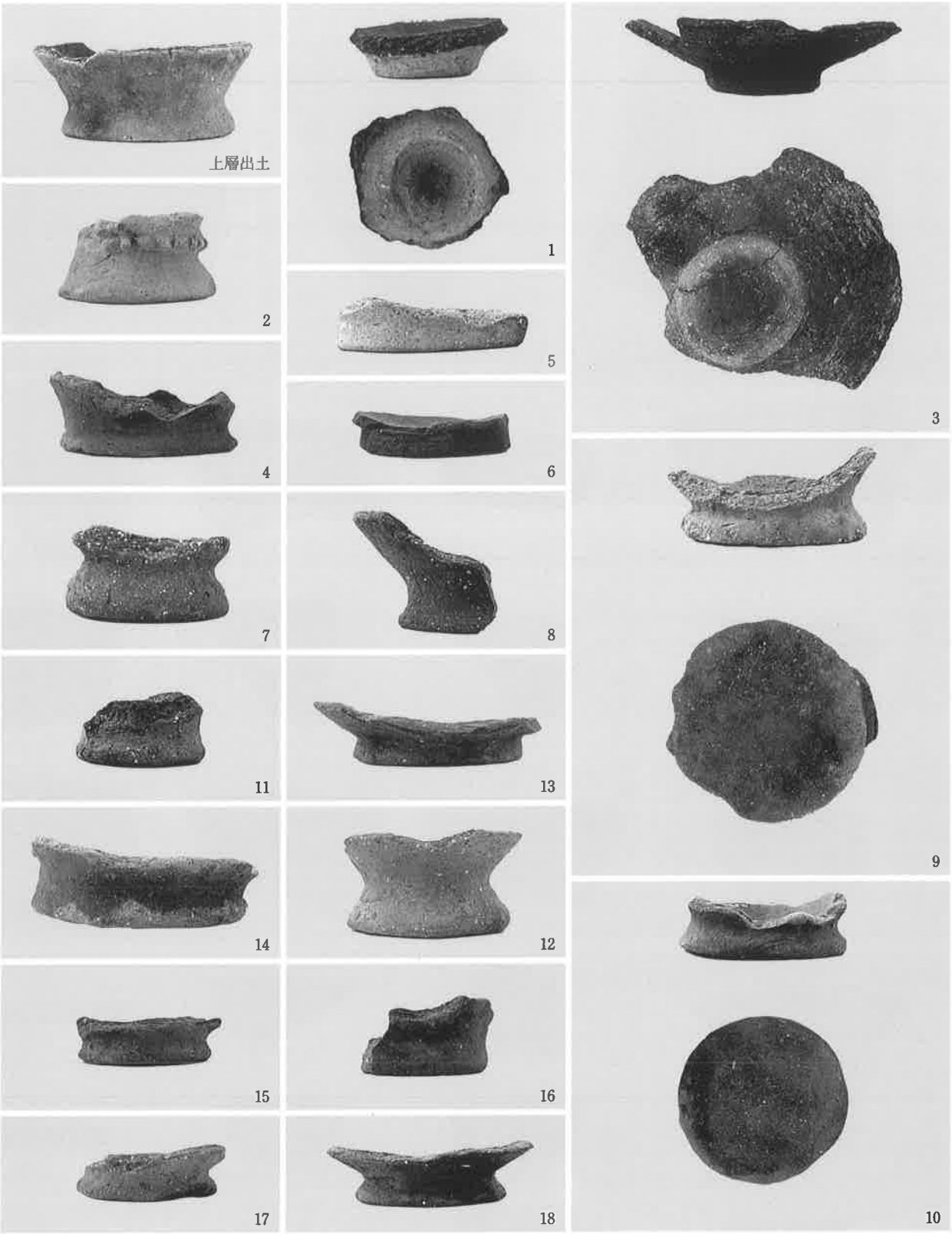
15

17

18

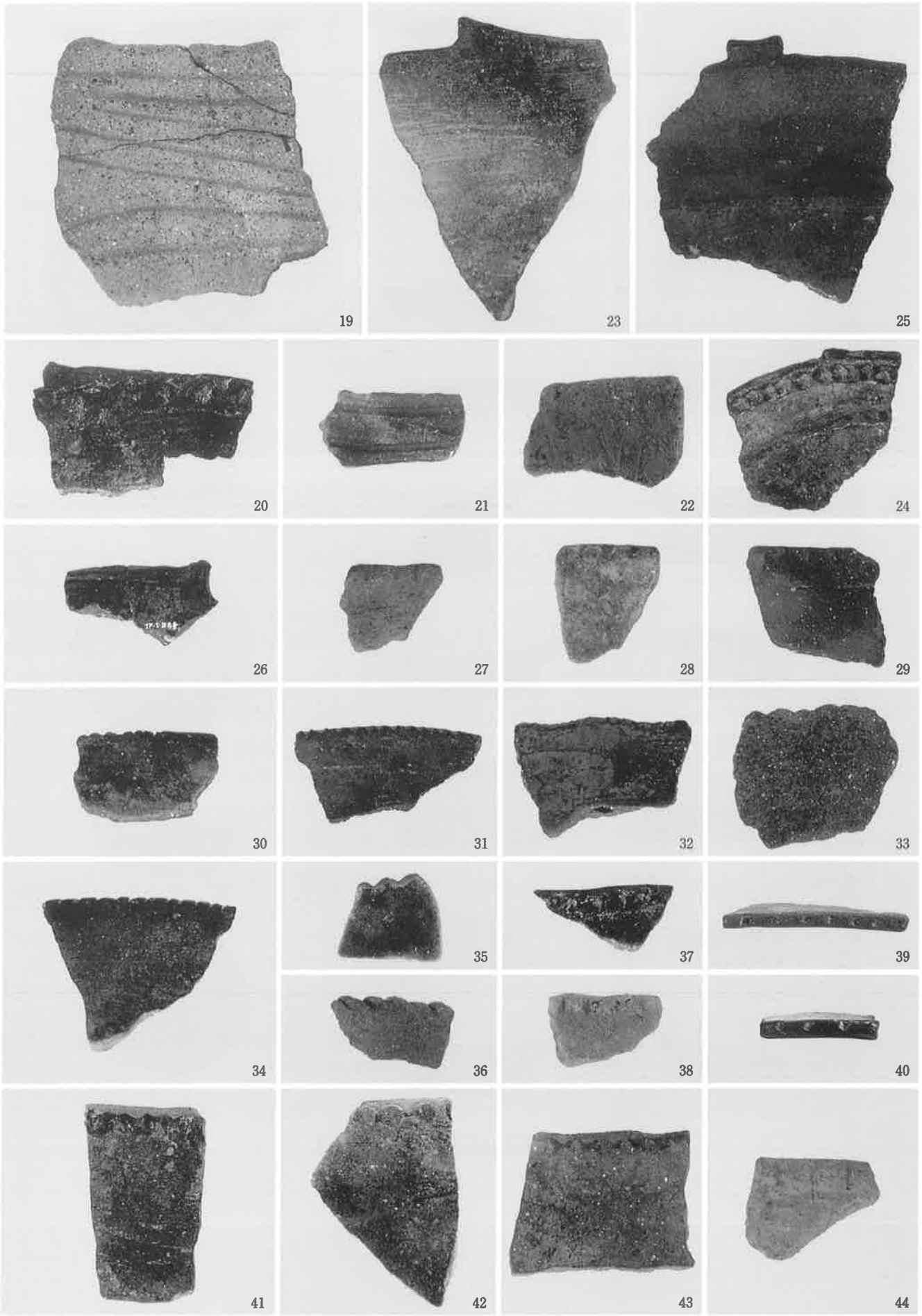
19

第Ⅰ地区下層出土遺物

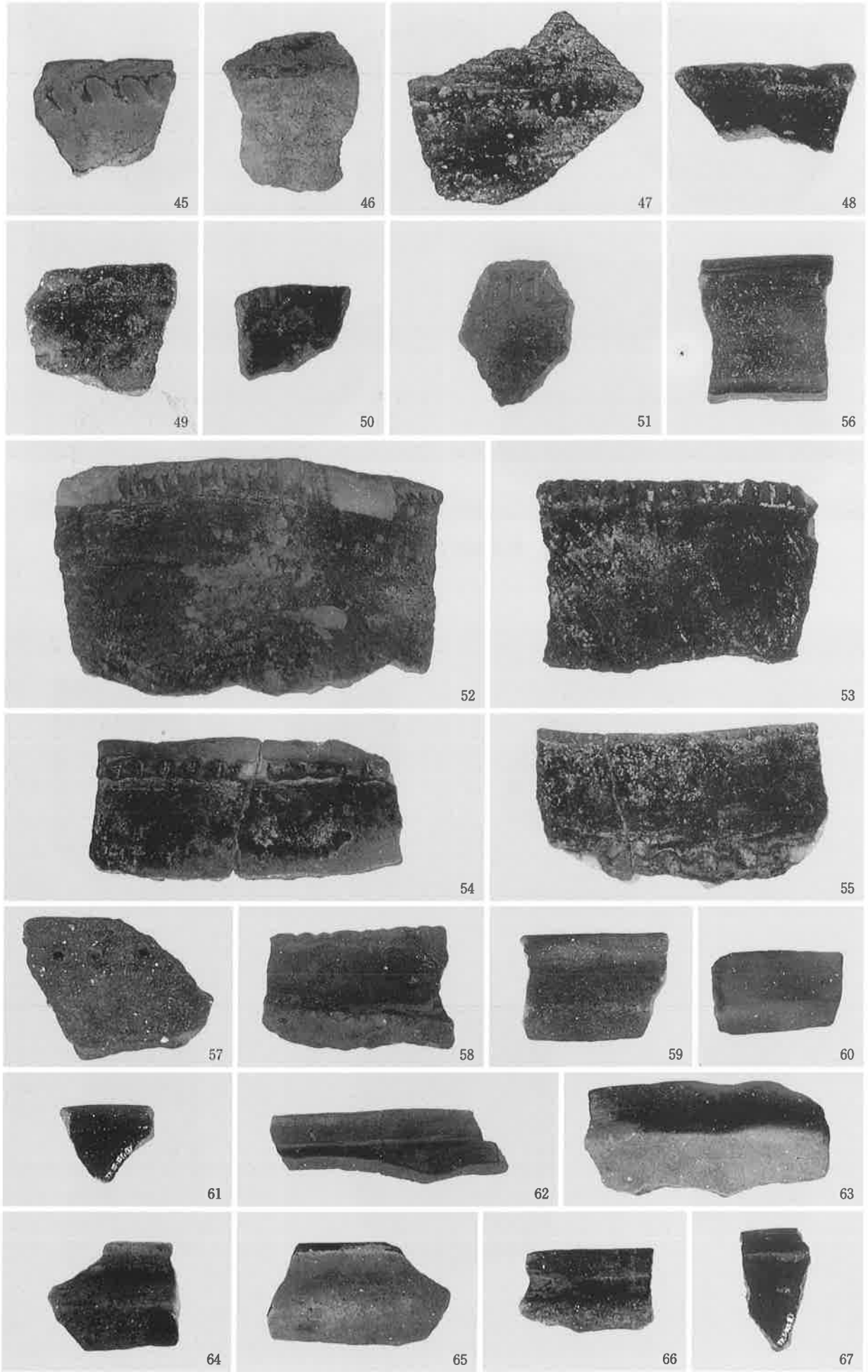


第Ⅲ地区上・下層出土遺物

図版6

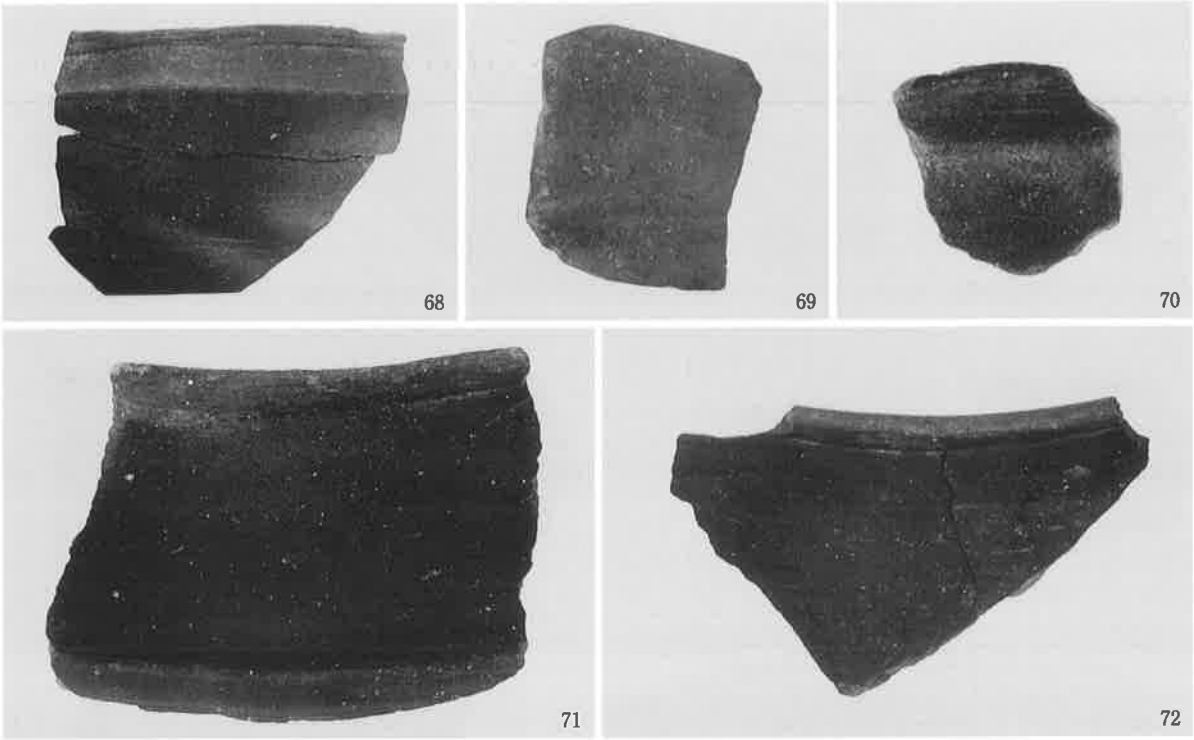


第Ⅲ地区下層出土遺物

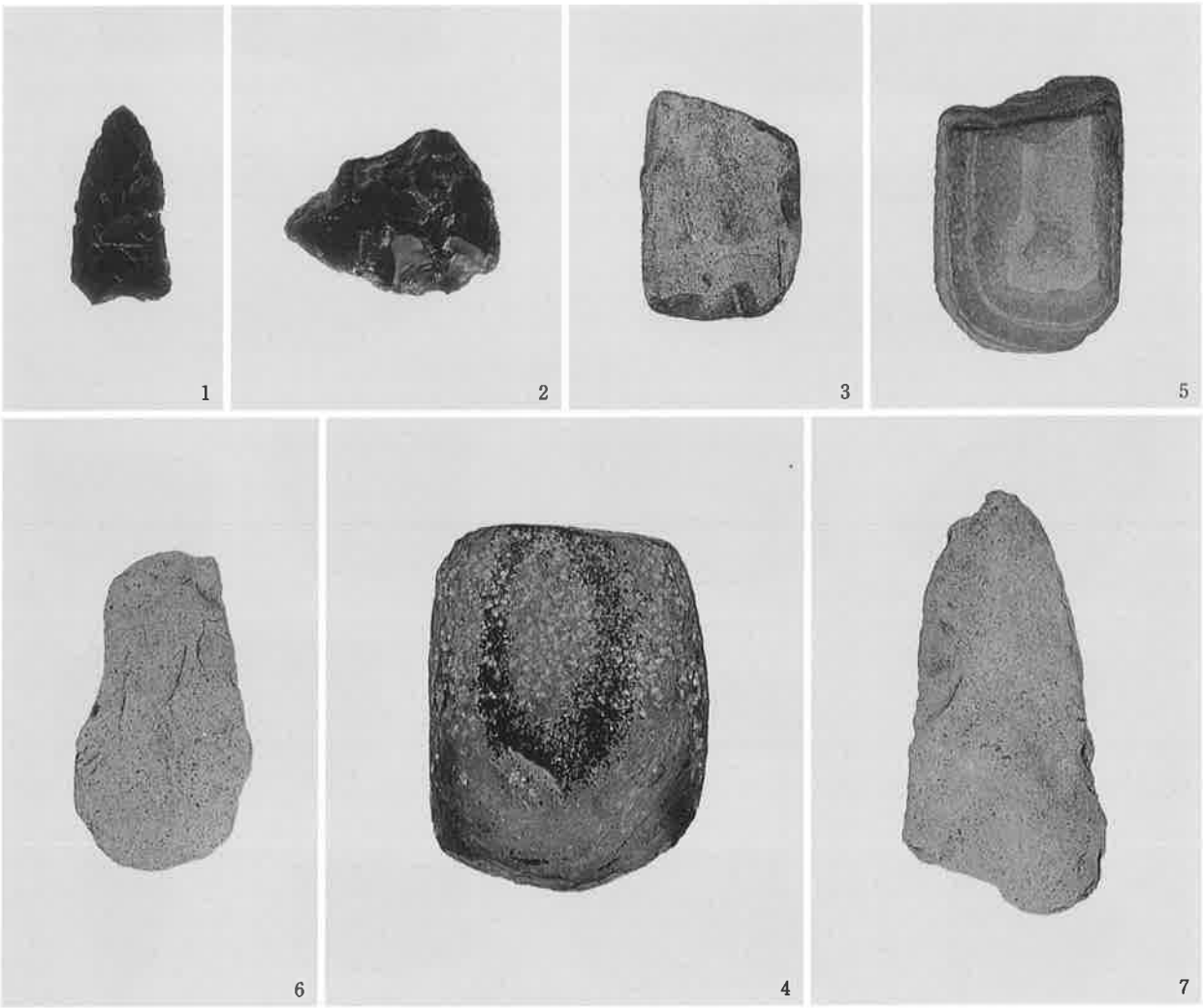


第Ⅲ地区下層出土遺物

図版8



a. 第Ⅲ地区下層出土遺物



b. 石器

報告書抄録

ふりがな	たかたこしょうずいせき	
書名	高田小生水遺跡	
副書名	福岡県前原市大字高田字小生水所在遺跡の調査報告書	
巻次		
シリーズ名	前原市文化財調査報告書	
シリーズ番号	第76集	
著者名	江野道和　志賀智史　本田光子	
編集機関	前原市教育委員会	
所在地	福岡県前原市前原西一丁目1番1号	
発行年月日	西暦　2001年3月31日	
保管場所	[写真] [図版] [遺物]	前原市立伊都歴史資料館
保管場所所在地	福岡県前原市大字井原916番地	

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高田小生水遺跡（たかたこしょうず いせき）	福岡県前原市（ふくおかけんまえばるし）大字高田（おおあざたかた）字小生水67番1（あざこしょうず ばん）	40222		33°34′6″	130°14′48″	2000.8.4～200.9.26	対象面積1254㎡ 調査面積288㎡	高層住宅建築に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高田小生水遺跡	自然流路	縄文晩期～弥生時代早期		縄文土器・漆塗り縄文土器・漆器・弥生土器・磨製石鏃・権状石製品・石器など	

高田小生水遺跡

前原市文化財調査報告書　第76集

2001年3月31日

発行　前原市教育委員会
前原市前原西一丁目1番1号

印刷　(有)システム・レコ
福岡市東区土井1丁目11−7